

最後の 40 年間、十字軍は歴史研究における最も精力的な部分の 1 つになっていたが、このような歴史研究においてはこれら異常な出来事をいっそう理解し解釈しようとする傾向があった。西ヨーロッパのキリスト教世界の人々にエルサレムを取り戻したいと思わせたものは何だったのか？ 第一回十字軍(1099)の結果によって東地中海のムスリム・キリスト教徒・ユダヤ人の共同体にもたらされた影響はどんなものだったのか？ 十字軍が西欧の人々や社会秩序に与えた影響はどうだったのか？ 人々はどのように十字軍を記録し、最終的にその遺産は何だったのか？

1980 年代には十字軍の定義に関する学問的議論が加速するにつれて学術論争がかなり前進した。十字軍の範囲がわかるようになって、十字軍が年表の面でも視野の面でも 11 世紀当初の聖地巡礼からさらに続いていたという新たな認識に至るようになった。つまり、フランク語が東方で終焉を迎え(1291)それが 16 世紀まで続いた後にもずっと十字軍は起こっていたということである。十字軍における目標という観点では十字軍はイベリア半島のムスリムへの対抗、パルト地域の異教徒への対抗、モンゴルへの対抗、ローマ教皇に政治的に反するものへの対抗、そして異教徒(例えばカタリ派やフス派)への対抗とも言える。このような枠組を受け入れることはこれら探検に対するローマ教皇の権威の重要性と同じく一般に多元的な立場と評される。

このような解釈が出てきたことで既存の分野は活気づきます多くの学者を引きつけるほどの影響をもたらした。これに伴って、金銭へいくらかあった既存の影響が控えめに扱われるようになり冒険に対する土地なき若き子孫たちの陳腐な決まり文句が鎮まってきたことで、十字軍の戦士たちの動機について再評価することにますます関心が向くようになった。以前以上に広範な根拠を用いることによって(特に特権、すなわち土地やもしくは権利の売上や貸出入)、特に第一回十字軍に対する支配的な刺激要素としての同時代の宗教の推進力というものへ重きが置かれるようになった。しかし、いっそう広大な世界によってこの学問的議論は妨げられそしてある意味刺激を受けたのである。9.11 の恐怖とブッシュ大統領が戦争の恐怖を伝えるために悲惨にも「十字軍」の語を用いたことで過激論者の嫌悪のメッセージは助長され、中世に遡るイスラムと西欧との間の長く広範な闘争という概念は非常に重要なものとなったのである。実際、もちろんのこと、そこまで単純な考えは極めて不完全だけれども、それはどの党派の過激論者にとっても強力な簡潔な物言いであり(オサマビンラディンからアンネシュブレイベイクや ISIS に至るまで)、そして明らかに、我々がこの History Today の広範なネットアーカイブを訪れてこれから見るような十字軍の時代の遺産を近代世界において研究しようという機動力を生み出した。

1075 年 11 月、フランス中部の町、クレルモンで教皇ウルバヌス 2 世によって第一回十字軍が召集された。「神の教会」(Church of God)を解放するために名誉や金を手に入れるためではなく、ただ信仰によるのみでエルサレムへ行く人なら誰でも告解1を十字軍に参加することで代用できるとウルバヌス 2 世は提唱した。この要請は、個々の新機軸を混合させたウルバヌス彼自身の良い思いつきであると同時に多くの現代の流行の融合であった。この 70 年間、キリスト教徒は、イスラム教徒の領土を、例えばイベリア半島やシチリア島といったヨーロッパの端に押し戻していた。いくつかの例の中には、運動の参加者に対して宗教的な報酬を提供することを通して、教会はこれらの出来事に関わるようになった。

ウルバヌスは、信者たちの宗教的な幸福に責任を負っており、十字軍は、西ヨーロッパの罪深い騎士にとって絶え間ない内輪揉めや弱者からの搾取(俗民も聖職者も同様に)をやめ、彼らの暴力に満ちた生活を償う機会を与えた。ウルバヌスは、十字軍を聖なる都市エルサレムをイスラム勢力から奪還するといった宗教的に功績のある行動へ騎士が自らの力を向けるチャンスだと考えた。(イスラム勢力は 637 年にエルサレムを手に入れている。) 十字軍に参加する代わりに彼らが告白した罪は許されたであろう。また、それは、教会によって罪深い人生の結果として繰り返し強調されてきた運命である地獄の業火の中で永遠の罰を受ける見込みから彼らを守るだろう。より詳しく知るには 1997 年の論文で十字軍の宗教的な関係(context)を暴いた Marcus Bull を見なさい。

そのように熱烈にキリスト教が信仰されていた時代の中で、エルサレムは、キリストが生きていた場所として中心的な役割を占めていた。エルサレムを解放する目的と(恐らく誇張されているが)レバント2のキリスト教徒や巡礼者が受けた恐ろしい仕打ちの話が繋がったとき、イスラム勢力を押し戻す機会と共に復讐への欲望は、非常に力強い連合を形成した。ウルバヌスは、信者たちに気を配っており、西ヨーロッパでの宗教上の地位を向上させている。教皇は神聖ローマ皇帝ハインリヒ 4 世(叙任権闘争)

との強大な闘争に引き込まれており、十字軍を召集することは教皇の名声を大きくするという事実は、ウルバヌスにとってはあまりに良い機会であり、見過ごすことはできなかった。

十字軍の契機は、他のキリスト教勢力であるビザンツ帝国からやって来た。皇帝アレクシオス 1 世は、セルジューク朝が首都コンスタンティノープルに侵攻してくるのを恐れた。ビザンツ帝国の人々はギリシャ正教徒であるが、それは 1054 年以来カトリック教会と分裂状態にあった。十字軍の派遣は、ウルバヌスにカトリックが正当なキリスト教へ近づき、ギリシャ正教との断絶を修復する機会を与えた。

ウルバヌスの十字軍派遣の要請への反応はびっくり仰天したものがほとんどで、遠征の知らせは、西方ラテン世界で多くの波紋を呼んだ。何千人もの人が、罪からの救いを成し遂げ罪深い人生の結果がもたらすものから逃れる新しい方法だと考えた。しかし、名誉、冒険心、金品、少数ではあるが土地に対する熱望もまた十分に考えられる。(十字軍の遠征が終わった後、多くの従軍者は故郷へ帰った。) 聖職者たちは、そのような凡俗な目的は、「神」の不興を招くと信じたため、彼らはその凡俗な動機に眉をひそめた。多くの信者は、信心深さとこれらを順応させるのは難しくない。それゆえ、十字軍の指導者の一人であるプロワ伯エティエンヌ 2 世 3 は、故郷にいる妻であるアデル＝ド＝ノルマンディー 4 (ウィリアム 1 世 (征服王) の娘) に送った手紙の中で、彼は、皇帝から有益な贈り物や名誉が与えられ、ヨーロッパを出発した時より 2 倍の金・銀・他の財を持っている。全ての社会階層の人 (王は除く) が第一回十字軍に参加した。規律が不十分な熱狂者たちの最初の突撃は特にラインラント 5 で恐ろしいほどのユダヤ排斥主義の顕在化を多く引き起こした。彼らはユダヤ人のお金を取ることで遠征に必要なお金を手に入れようと試みており、自らの土地でキリスト教の敵と考えられた集団を攻撃した。民衆十字軍として知られるこのような派遣団はコンスタンティノープルの外で実際に問題を引き起こしていた。皇帝アレクシオスは彼らをボスポラス海峡を越えてセルジューク朝が破壊した小アジアへ案内した。

指導者の貴族たちの記録に従えば、主力の軍隊が 1096 年の間にコンスタンティノープルに結集した。皇帝アレクシオスは、そこまで多くの西ヨーロッパ人が現れるとは予想しておらず、セルジューク朝に奪われた土地を回復するチャンスだと考えた。十字軍の食糧と輸送の必要性を考慮に入れると、特に民衆十字軍が引き起こした問題の余波や軍隊の主力にビザンツ帝国の領土を最近では 1081 年に侵略していたシチリア島のノルマン人が含まれている事実がある中で、新たな到着者に対処するときに用心深くいること以外に何も言えない訳ではないが、皇帝はこの関係で優位に立った。これについては Peter Frankopan を見なさい。十字軍の指導者のほとんどは、物資やガイド、豪華な贈り物をもらう代わりに以前ビザンツ帝国が保有していた土地をアレクシオスに返すと誓約した。

1097 年の 6 月、フランク人が戦利品の分配に不満を抱いているという勝利の後遺症が残る中、十字軍とギリシア兵は皇帝の主な目的の一つであるコンスタンティノープルから 120 マイル離れた手強い要塞都市ニケーアに達した。十字軍はアナトリア平原に向かって、内地へ移動した。トルコ兵の大群は Dorylaeum 近くの Taranto (イタリアの都市) の Behemond の兵を攻撃した。十字軍は分断された部隊の中を行進した。そして騎馬兵の素早い攻撃という慣れない戦術をとった。Toulouse (フランス南部の都市) の Raymond と Bouillon の Godfrey が助けに現れるまで、彼らが打ちのめされるのをずっとみていた。この苦難の末の勝利はキリシタンに価値のある教訓を与えた。遠征に行った十字軍は成長を繰り返し、より大きな脅威となっていくた。

その後数ヶ月、兵は Boulogne (フランス北部の都市) の Count Baldwin のもと Tarsus と Mamistra の Cilician 町を獲得しながら部隊を引き連れてアジアを横断した。一同は Cappadocia を経由してキリシタンの東端の大地、エデッサへと向かった。そこでは大勢のアルメニア人が十字軍を迎えてくれた。地域の政治紛争は、Baldwin が力を誇示することができていること、また 1098 年がいわば第一次十字軍時代と言えるものになっていることを示していた。

この時までには十字軍はアンティオキアに到達した。アンティオキアは今日ではトルコ南のシリアとの境界の内部にある。この大きな都市はローマの植民地であった。キリシタンにとってかつて聖 Peter と聖 Paul が住んでいたその場所は重要であり、キリスト教の五本山の一つであった。その場所はビザンツにとっても大切であり、1084 年までは彼らの統治下の主要都市であった。その場所は周りの土地と比べてもとても広大だったのだが、十字軍は全力で攻め込んで服従させた。1098 年の春に Genoese 戦隊からの援

助があったものの、1097年の冬が越えてからは状況は非常に悪くなった。その行き詰まりは Behemond が地域のキリシタンの一人を説き伏せて要塞の一つを裏切らせたことでようやく終焉を迎えた。そして 1098 年の 6 月 3 日、十字軍は街に侵入してそれを獲得した。しかしながら彼らは完璧な勝利を手にしたわけではなかった。なぜなら解放されたムスリム兵の大群が Mosul（イラクの地名）からやってきているという知らせによってなされた問題、すなわちそこにそびえ立つ要塞は未だムスリムの手にあるのだという事実があったからである。食料不足、騎士にとって必要不可欠な馬の欠損によって、モラルは地に落ちた。十字軍の中でも最も古株だった Blois（フランスの都市）の Count Stephen は一行の運は尽きたのだと思い、他の数人の仲間とともに逃げて行ってしまった。彼らは増兵しようとしているアレクシオスに会いに行き、十字軍にはもう先がないということを告げた。それを信用したギリシアの統治者は引き返してしまった。そんなことが起きている間、アンティオキアにいた十字軍一行は十字架に架けられているキリストを貫いたと言われている聖槍の遺物を「発見」して歓喜に沸いていた。洞察力を持った Raymond の聖職者が聖 Gilles の兵にどこを掘るべきか教えた結果、その聖槍は見つかった。それを Provençal の軍隊への簡単で都合の良いやる気の起爆剤になるだろうとみなした者もいたが、実際には多くの者にとって生命感をもたらすものとして作用した。2週間後の 1098 年 6 月 28 日、十字軍は最後まで残ったなけなしの 100 頭ほどの馬を集め、今ではよく知られている戦線へ送り込みムスリムの一群を襲った。天が助けを施したのだと記録されている通り、十字軍は勝利を収め、要塞はしっかりと降伏し引き渡されたアンティオキアはムスリム解放軍が訪れる前の統治を完全に回復した。

勝利したものの、ローマ教皇の特使でありこの軍事行動の精神的支柱であった Adhemar of Le Puy を含む、疲弊したキリシタンの多くが病に倒れていった。年配の十字兵は残念ながら離脱させられた。Behemond はアレクシオスがまだ取引を満たしていないため彼自らがギリシアと結んだ誓約は無効であり征服に関する一存は彼の元にあるという旨を主張し、彼の勢力をアンティオキアに留まらせ、そこで結集させようとした。十字軍の所属員たちはこの政治的な小競り合いに飽き飽きしていた。なぜなら彼らはイエルサレムにあるキリストの墓へ赴くこと、そして兵士たちを南に向かわせることを望んでいたからである。道中、彼らは街々や都市と個別に契約を結んで直接対決を避け、1099 年の 6 月にイスラエルに到達した。John France は 1997 年からその都市の獲得を関連づけてまとめている。

1099 年 6 月 15 日、一群は北と南の城塞都市をターゲットに絞った。Bouillon の Godfrey の兵はその包囲網をなんとか壁を越えられる寸前のところまで進めた。キリシタンはそのまま都市に攻め込み、その後数日は乱闘入り乱れる宗教的な殲滅行為が行われた。数年後の 3 月によりやく戦闘はひと段落ついた。リアルな描写よりも印象的に光景を示す「apocalyos Book of Revelation(14:20)」に書かれていた「膝まで浸かる血の海を歩く」という表現は誇張であり実際には不可能であったが、ムスリムとユダヤの都市防衛兵が大量に殺されているひどい大虐殺の光景だった。十字軍は聖なる墓所にあるキリストの墓に目的を達成した感謝を示した。

彼らの勝利はまだ達成されていなかった。エジプトの大臣は十字軍の大躍進を複雑な思いで眺めていた。カイロの Shi'ite caliphate の護衛はシリアの Sunni ムスリムたちを嫌っていたが、一方で新しい宗教勢力の力が生まれるのもまた好ましく思っていなかった。1099 年 8 月、彼の勢力は絶対的劣勢であるにも関わらず Ascalon の近くで十字軍に戦いを挑んだ。キリシタンは勝利を収め、大量の戦利品を獲得した。目的を達成した時には既に疲弊した十字軍の大半は家族の元に帰ることができないほどに衰弱しきっていた。もちろんレバントに残り、キリストの遺産を守って自らのために伝道を立てる選択をした者もいた。レバントの対極に位置する Chartres の Fulcher はイエルサレムの王国に騎士が 300 人しかいないことを嘆いた。土地を永続的に治めるためにはそれはあまりに少数であった。

しかし、次の 10 年間、在地イスラム教徒の勢力の削減や西からやってきた艦隊のお陰で、キリスト教徒は沿岸全体を支配し居住可能な場所を作り始めた。ヴェニス、ピサ、ジェノヴァ（特に早い時期）などイタリアの交易都市の援助はすごかった。イタリア人の動機はしばしば疑問視されたが、彼らの町の規模を超える貿易の中心としても認識されていたエルサレムを奪うためのその他の最新のものと全く同じであることを示す説得力のある証拠があった。この時代の貴重な在俗資料であるジェノヴァのガファロの記述は、このような動機を理解する事がほとんど難しくなかったことを示している。彼はヨルダン川に移住し、聖墓で開かれたイースターの儀式に参加し富を得たことを祝福した。イタリア人の船乗りや兵士は莫大な交易権、言い換えればイタリア人がイスラム圏との（特に香辛料の）貿易をはじめとした経済活動の促進を見返りに（アクレ、ガエサレア、ジャッファなどの）沿岸の重要な港を得ることを助けた。聖地への人々の移動も彼らの重要な役割だった。そして聖地はキリスト教徒のものとなり、数千ものヨーロッパ人がそこを訪れ、ローマ・カトリックの支配下になったことで、宗教コミュニティが繁栄した。よって十字軍遠征の背

景であった基本的な根拠が達成された。イタリア人の貢献がなければ十字軍の支配が長続きできなかったと言える強い根拠である。

第1回十字軍のある興味深い副作用（と今日の学者が計り知れない興味を抱くもの）はエルサレム奪還後に歴史的記述が極めて大量に記されたことだ。この驚くべき話はあらゆるキリスト教徒の物書きにこれらの出来事を中世初期の歴史にはなかった方法で書かせる刺激を与えた。古代の英雄と同等の名声を得た者が同時代にいたため、英雄譚を振り返る必要は最早なかった。この時代は識字率が上昇し、十字軍の文献の制作や循環がこの運動の大部分を占めていた。口承の伝承に加え、第1回十字軍を祝福する無数の歴史物語が武勲詩の形で騎士道時代の繁栄の幕開けの中で人気だった。歴史家は出来事の枠組みを作るためしばしばこれらの話に着目したが、いまは多くの学者がこれらの文献が書かれた理由、書き方の違い、伝統的で聖書のような主題の使い方、作品間の関係性や文章中での引用をより深く考察するため、資料としては重視していない。

イスラム世界の反応も興味を増している分野の一つだ。今では第一回十字軍が中東に到着した際、ムスリムがスンニ/シーア派の分裂に加えスンニ派内部でも極めて分裂していたことがいまでは明らかになっている。Robert Irwin は 1997 年に記事で十字軍のムスリムに対する宗教的な影響の考慮と同等にこれにも注意すべきだとしている。1090 年代半ば、セルジューク朝の首長の死と、外患への注意以上に宗教の内部対立に主に直面していた敵との十字軍の遭遇という運命的な一致があった。自明に第一回十字軍が新たな出来事であることを考えればこれは理解できる。ヌル＝アッディーン（1146–74）とサラディンの時代まで、支配階級が協調し宗教的義務を果たそうと駆り立てたがほとんど無視されたダマスカスの聖職者 as-Sulami が嘆いたように、聖戦の魂がなかったことも明らかだ。

フランク族の移住者は中東の複雑に混ざった文化や宗教に適応する必要があった。人数が少なすぎたため、彼らは土地を奪うとすぐに Pope Urban 2 の聖戦の美辞麗句からなる大義名分、時には隣り合う多くのムスリム国家と同盟を結ぶといった宗教的には苦痛な行動を変えていく必要があった。彼らが人口の大部分（とフランク族の支配下で生きる多くのムスリムや東方教会の教徒）を支配すれば、土地を耕したり納税したりするものがおらず経済も簡単に崩壊しただろう。イスラエルの学者 Ronnie Ellunblum による近年の考古学調査は、フランク族は以前信じられていたほど在地の人々と離れて都市で単独で生活していたわけではないことを示した。在地のキリスト教徒社会はしばしば彼らと並存し、時には教会を共有したりもした。

エデッサ、アンティオキア、トリポリ、エルサレムのフランク族の領域は中東の宗教・政治・文化的に複雑な地域で作られた。あるエルサレムの初期支配者は在地のアルメニア人の貴族階級と結婚し Melisende 女王（1131–52）はラテン教会と同様在地層の支援に強い興味を持っていた。戦禍を被ったラテン東部の環境を考慮すると、多くの支配者間での高い死亡率に加え起源の違いは女性が以前より強大な力を得ることを意味した。Melisende の例では、Simon Sebag Montefiore が 2011 年に論文で書いたように、12 世紀の間にキリスト教徒の当時のムスリム観を反映しエルサレムに都市としての性格を与えたように生き残るため強い人間が必要であった。

フランク族は常に人が不足していたが、生き残るために軍事集団のような革新的なことを始めた強力な集団がいた。ホスピタル騎士団員の例では治療を通じて、テンプル騎士団の例ではヨルダン川へ向かう清貧・純潔・従順といった修道士の誓いを立てた訪問者を守るためにといったように、集団は移住者の支援を助けるため設立された。それは人気の基本理念となり敬服・感謝した移住者からの寄付は軍事集団が土地所有者、城の所有者、キリスト教徒の王国初の特許軍といった主な役割を伸ばすことを意味した。彼らは在地領主の支配から独立しており、時には王との問題や相互の小競り合いを引き起こしたりもした。テンプル騎士団やホスピタル騎士団も西欧にまたがる広大な領域を所有しており、レヴァントでは好戦的な組織としての収入をもたらし、特に城の構築はキリスト教徒が領域を保持するのに不可欠なものとなった。

1144 年 12 月、アレppoとモスルのムスリム支配者である Zengi がエデッサを攻略し、中東における領地をフランクから回復する最初の一撃をもたらした。この(ヨーロッパ側にとっての)災難の知らせが、教皇 Eugenius3 世を第2回十字軍(1145～1149)に駆り立てた。この第一回十字軍の先人たちの業績に応えんとする天命と、クレルヴォーの(聖)ベルナルドゥスの巧みな言葉によって、フランスとドイツの支配者は十字軍に参戦していった。

イベリアのキリスト教支配者はジェノヴァ人と合流して南スペインのアルメリアや北東スペインのトゥルトーザを攻撃した。同様に、北ドイツの貴族やデンマークの支配層はステティン周辺のパルチック岸に住む異教徒のヴェンド人に対して進撃を開始した。これは教皇エウゲニウスにとって当初の筋書きにはなく、寧ろ彼(教皇)に(軍隊側から)送られた訴えに応じてのものだったが、それは当時の十字軍の自信の度合を示している。……結局は、このような楽観主義は根拠のないものだったとわかったのだが。

1147 年、フレイッシュとリーネランドというアングロノルマン人集団の十字軍がリスボンを攻略し、イベリア半島におけるほかの回復運動も全て成功を取めた。しかしバルチック海での運動はほとんど何の成果も得られず、一番名声を呼んでいた遠征である聖地エルサレム奪還運動は大失敗に終わったのであった。(そしてこれはジョナサン・フィリップスが 2007 年の記事で述べている通りだ。) その 2 つの軍勢は規律、物資供給、財源を失っており、両者はアナトリア半島を通過する際セルジューク・トルコに手酷くやられた。その後、ラテン人の植民者と協力して、十字軍はシリアにおける最重要都市ダマスカスに包囲攻撃をしかけた。しかしわずか 4 日ののちに、Zengi の息子 Nur ad-Din 率いる解放軍の脅威によって十字軍は不名誉なる撤退に追いやられた。十字軍は中東のフランク人たちに今度の失敗の責任を追及した。彼らが献金を受け取って撤退したことを非難したのだ。何が真実であれ、ダマスカスにおける挫折は確かに十字軍の熱狂を傷つけ、次の 30 年にわたり、要請があったにもかかわらず、聖地エルサレムへの十字軍は目立って行われなかった。ただし、フランク人たちを完全に弱体化したものと捉えることは大きな間違いであろう。彼らは 1153 年にアスカロンを攻略しレバント湾の支配権を得た。それはムスリム船の脅威を減少させた点で、貿易や聖地巡礼のための交通安全にとって重要な進歩であった。

しかしながら、翌年 Nur ad-Din はダマスカスの覇者となり、十字軍の時代で最も多くの都市がアレppoに協力し同一人物の支配をうけることになった。それはフランク人にとって多大な脅威となった。Nur ad-Din の思慮深く宗教に敬虔なさま、マドラサ(教育施設)の推進運動、エルサレムの美点をうたうジハードに関する詩や散文といった彼の作品群が、宗教的共同体或いは支配層の間の絆を新たに生み出した。1160 年代にスンニ派の王 Nur ad-Din はシーア派であるエジプトの支配を確立し、フランクに対する戦略的脅威を劇的に増大させ、同時にナイルデルタの恵みと要所アレクサンドリアの港を通して財政収入をも向上させた。

Peter Edbury によれば、この時代の東欧ラテン世界の歴史には詳細に当時最も有名な歴史家であるテュロスの大司教の William が関係していた。William は非常に教養ある人物で、若き頃ハンセン病に悩まされたという悲惨な Baldwin 4 世(1174-1185)の統治下では 1170 年代後半から 1180 年代にかけて忽ち激しい政治論争に巻き込まれるようになった。彼の後継者を立てる必要があったため、対抗する機能が表出しフランク族に互いに言い争わせるエネルギーを多く費やさせるような機会が生じた。といってもそれは彼らが、本拠地のエジプトからやって来て前任の統治者の王朝を占拠し東欧近辺のムスリムを一致団結させフランク族をエルサレムから追い出すことを望んでいたサラディンという Nur ad-Din の野心ある後継者に深いダメージを負わせられなかったということではない。Norman Housely は 1987 年の記事でこの時代をうまく述べている。しかし、1177 年にフランク族は Montgisard の戦いで勝利し、その勝利は西欧中に広く知れ渡り人々が当事者を助ける必要が実際にはほとんどないと確信した。乗り物でダマスカスからたった 1 日で着く Jacob's Ford の大きな城では、1178 年と 1179 年にはサラディンにその地を破壊するよう要求する別に活動的なふるまいが見られた。なお 1187 年まではスルタンは大きく集まっていたが、それはエジプトやシリアやイラクからやって来た脆い連合だったけれども、フランク族を戦いの場に引き出し 7 月 4 日の Hattin でのひどい敗北を彼らにもたらすには十分であった。数ヶ月の間に、エルサレムは陥落し、サラディンはメッカとメディナに次ぐ 3 番目に重要な都市を取り戻し、その功績はいまだに長年語り継がれている。

## 旅行家のお話（全訳）（要約）

エヴリヤ・チェレビはオスマントルコの紀行記作家である。彼は人生のほとんどを旅に費やした。

皆が各々のガイドブックを持っている。－ホラントやヘブリディーズ諸島（スコットランド西部）にあっての「ジェイムスボスウェル」（スコットランドの伝記作家）、イタリアにあっての「ベデカー」、ロンドン中心にあっての Iain Sinclair。オスマンの歴史家にとっては「エヴリヤ・チェレビの紀行」か「旅の本」だ。イスタンブルをぶらつくか、トルコに遠征するか、スルタンが支配する地域へはるばる向かうか、この 17 世紀の冒険家が成し遂げた偉業は欠かせない参考書である。

エヴリヤ・チェレビ（チェレビは「ジェントルマン」という意味である）はオスマンスルタンの臣下である。彼は 1611 年にイスタンブルに生まれた。1640 年に初遠征して 1685 年に亡くなるまでの間、彼はほとんどずっと旅をしていた。（例えば）クレタからポーランドの領域を旅した。ナイルを横断した。アゾフ海を周った。現在のオーストリアからイラクにかけて都市や町、村々を巡回した。彼はオスマン帝国の勢力が最大で、まだその絶大な力を有していた時分に生きていた。

今年はエヴリヤの生誕 400 周年記念の年である。ユネスコはその注目すべき人生とその業績を記した「旅の本」を評価している。約 2400 のエヴリヤの本は長い旅路を記したイスラム文学であり、これまで書かれた中で最も長いものだ。それは 17 世紀のオスマンの歴史をまとめた資料の中で最良のもので、今もおトルコ国外にいる読者たちにも親しまれている。

特権階級に生まれた彼は当初は順当に宗教者になり、ムラト 4 世に重用されるまでになった。しかし未知なる土地に対する好奇心は強く持っており、予知夢で旅に出よう示唆されたことがさらなる後押しとなって、彼は旅に出かけた。

エヴリヤ・チェレビは特権階級の生まれであった。彼の父はスルタンの金細工師のチーフで、母はアブハジア（ジョージアの一部）の出身だった。他の同階級の人々と同様、彼はマドラスで学び、コーランの暗唱者兼祈祷者になった。学のあるオスマン人はトルコだけでなくペルシャやアラブについてもよく知っているのだが、エヴリヤはさらに父の工房で働くムスリムでない工師から聞き、ギリシアや西ヨーロッパ世界のことも詳しく知った。

彼は法律に長けていたおかげでムラト 4 世（1623-40 の治世）の御眼鏡にかなった。ムラト 4 世は彼をトプカプ宮殿へと連れて行き、そこで学ばせた。トプカプ宮殿では他にもカリグラフィ（＊言えば日本の習字みたいなもの）や音楽、歌唱などが学ばれていた。スルタンはその才能を詩作だけでなくそれら諸処の芸術分野で発揮しており、特にユーモアやウィットに富んだ会話でその右に出るものはなかった。そしてその両者の間では親密な関係が築かれ、エヴリヤ曰くムラトは「非常に愉快な仲間」であったと言う。

しかしエヴリヤは王宮での生活は避けていた。20 の年になるまでに彼が書き記したことには、イスタンブルの近くの町や村、広場にぶらりと出かけると世界をもっと見たいという思いがふつふつと湧き上がってきたという。托鉢僧の行列から抜け出して、放浪する聖人から遠く離れた異国の地における魅惑的な話を聞いたこともあった。しかし彼は息を止めるような家族の愛情から解放されえることに強い絶望の思いを持っていた。その思いからようやく解放されたのは彼が自身の未来を予示する夢を見た時であった。

エヴリヤは夢の中でイスラム教の初期の聖人たちの中におりその中心ではまさに預言者ムハンマドが朝の御祈禱をしようとしていたところであった。ムハンマドはエヴリヤに御祈禱するよう促し、それが終わると彼を自らの眼前に招き寄せた。エヴリヤはムハンマドのとりなし—オスマントルコにおいては Sefa'at という—を乞おうとしたが、口が滑ってその代わりに seyahat、すなわち旅を乞うてしまった。「予知夢」というものはオスマンの記によく見られるものである。エヴリヤは「旅の本」で予知夢についてことあるごとに記している。しかし彼が路上暮らしを始めたきっかけを記したもののほど影響力を持つものはない。

Evliya は政府の役人の側近となり、外交官など様々な役割を果たすため各地を旅行したほか、軍事行動にも従い関する色々な記述を残した。その陰には彼が長年従った宰相 Melek Ahmed Pasha がいた。

Evliya が最初に旅したつ前の 10 年、以前オスマン帝国の中心地だったブルサ（トルコ北西部の都市）を訪れていた会社の友達がイスタンブールからマルマラ海を渡った。この間彼は夢の中で預言者が伝えたように、その街の歴史案内を作った。これは彼の「旅の本」の最初の部分を含むもので、長くて詳しくカラフルな、1638 年オスマンと敵対したサファヴィー朝イランからバグダッドを奪回したスルタンの記念日の前夜のムラート 4 世以前のイスタンブールの熟練工のパレードの様子を伴うものだった。

ブルサへの旅から戻る最中、家族に知らせずに、Evliya は父の友達でトラブゾン（トルコ北東部の都市）州の統治者にも指名されていた者とアナトリア北部の岸に向け出港していた。そこから彼はコーカサスやクリミアの様々な政府の役人の側近となり続け、サファヴィーへの特使としてイランの都市タブリーズへも旅をした。Evliya は 1641 年、オスマンのアゾフ包囲の際主要な司令官へ嘆願書を届ける者として仕えたと書いている。彼はこの時シリアを訪れたとも、1645 年に始まりクレタ島を治めたヴェネツィア共和国とオスマンとの長い戦いの初戦となったカニア包囲にもいたとも主張している。

そのような運の良い旅行は Evliya の将来の旅行のパターンを決めた。彼はよく地位ある仕事をするオスマンの大物の側近の役人として旅行し、出資者から特定の指令を受けると彼が本拠地とした地域への旅の機会を利用していた。嘆願書を届ける者、コーランの引用者、親密な連れとしての臨時の義務に加え、彼は徴税人、税関の職員、教師やイマーム、平和大使や特使としても仕えた。彼が自分の喜びのため、おそらくは自費で旅行に行くことはとても珍しかった。

1648 年、Evliya はダマスカスの政府の役人としてシリアを旅して回った。彼は、南はガザまで行きアナトリアを通過して循環するようなルートで約 2 年後に帰宅した。彼の母の親戚の Melek Ahmed Pasha(1588-1662)が 1650 年にしばらく大宰相になっていた時、彼は Melek とともにイスタンブールに残り、Melek が退去した際には彼の次の赴任地の Ochakiv（現在のウクライナの黒海沿岸）まで行き、バルカン半島東部の初めての旅行先としてソフィアまで行った。Melek は Evliya にとって不可欠な出資者となっていた。1655 年、彼が東方に送られた時、Evliya は彼に付き従いイラン・イラクを 8 ヶ月間旅行し、見たものすべてを記録した。

それから数年間 Evliya Celebi は名目上オスマンの家臣であったがしばしば独立の傾向を示したりハプスブルク家側についたりした王子達が支配したトランシルヴァニア、ワラキア、モルダヴィアでの軍事行動に参加した。この間彼はポーランドやウクライナも旅している。彼は彼が Melek の役所や 17 世紀半ばの秩序の崩壊に対処するため政府に入った権力者の大宰相 Mehmed Koprulu(在位 1575-1661)の役所から離

れ短い間以外 Melek に従い続けた。

Evliya は Melek が支配者だったボスニアで彼に再び従い、ここでもバルカン半島西部やハンガリーなど広大な地域を旅行した。1662 年、Melek が借金を集めるため彼をアルバニアに派遣した直後、Melek は死んだ。出資者はいなくなったものの、彼は家族への愛着から解放されたことに甘んじて、イスタンブールに短期間滞在した後、1663 年春に Mehmed koprulu の息子で新たな大宰相となった Fazil Ahmed Pasha の下軍隊を率いて出発した。Evliya はスルタンの統治下で騎兵として訓練されておりアナトリアで様々な騒乱を起こした反逆者に対する中央政府の長期の苦戦の中で追いつかれた。彼はその時主な軍のいくつかの行動も見ていた。中でも注目すべきなのがハプスブルクの司令官 Raimond Montecuccoli (在位 1608-80) がオスマン軍を下した 1664 年の St Gotthard の戦いである。Montecuccoli の勝利は長年のオスマン対ハプスブルクや代理者の戦いの最高潮で、1665 年 Evliya はとして 2 帝国間の約 20 年間の平和を約束させる任務のメンバーの一人としてウィーンへ配属された。

エヴリヤはウィーンの大聖堂の書庫や建築内装や芸術や医学に驚きをもって触れた。ウィーンを出てイスタンブールに戻るとそこでクレタの要塞の陥落を見た。この時期のパルテノンの一種異様なモスクとしての機能に関するエヴリヤの記述はすぐ後にそれが消え去ったために非常に重要なものとなった。

エヴリヤのウィーンとその王宮に関する長く快活な記述は彼の『旅行記』においてハイライトの一つである。彼は聖ステファン大聖堂、特にその書庫について驚嘆し、これをアレキサンドリアのモスクの書庫と比較した。そこは、彼によればコーランでさえ蛾や蛆虫やネズミに食われるようなところであった。彼は大聖堂の大理石の床についても述べ、これをモスクのじゅうたん張りの祈りの場やオルガン、絵画、彫像といった機能と対比させた。

ウィーンでエヴリヤは聖ゴットハードにより負傷した男の頭から弾丸を取り除く手術を驚きながらも見学した。それだけではない、抜歯も見た。ところで、彼の従来からの 3 本の歯は乗馬競技の際やりが当たって抜けてしまったため、これらの安定を外科医にしてもらった。彼は厚かましいことに 1658 年に訪れたイェルサレムについては共に話してきた聖職者よりもよく知っていると述べている。さらに彼は、レオポルド 1 世 (1658-1705) が大変感銘を受けたので彼から数反の立派な織物と 13 のドイツ時計をもらったと書いている。エヴリヤは社会集団の中で共にいる男女を見たが、女は酒を飲んで男や彼の連れと話しておりそこに連れる夫はおらず、振る舞いはみっともなく見えた。

ウィーンに滞在した後エヴリヤは再びクリミア半島に行き、続いて黒海の北岸へと東方に向かい、ケルチ海峡を渡りサラトフ・カザン経由でヴォルガ川を進んだ。彼は 1667 年にイスタンブールに戻った。

1669 年オスマンの民はついに 21 年間の包囲の末にカンディア (現 Heraklion) のクレタ島要塞を陥落させた。エヴリヤはイスタンブールからテッサロニキ経由でアテネへと旅しておりコリントで船に乗る前にモレアの辺りにいたが勝利を見ようとその地にいたのだった。1668 年に見たパルテノンについてのエヴリヤの説明だと、パルテノンは彼曰く他にはないようなモスクとしての機能を有していたというが、その記述はとても重要である。なぜなら、20 年も経たないうちにオスマンの火薬が点火され Morosini の大砲が落ちてきてそれは吹っ飛んでしまったからである。彼はカンディアがオスマンの手に落ちてからアルバニアへの次なる任務へと向かいそしてイスタンブールに戻ってくるまでの間に最初に祈願するという名誉を得た。

エヴリヤは晩年になっても積極的に旅に出た。イスタンブール→アナトリア半島をうろうろ→メッカ→カイロ→ナイル川の源流へ行こうとするが途中で諦める→カイロで死亡

チェレビはもう60近くだった。彼はそれまで30年間ほとんど休むことなく旅を続け、自身の冒険や災難の記録を取り続けていた。最終的にイスタンブールに6か月「抑留」されたのち1671年に彼は再び悲願の旅に乗り出した。これはムスリムの使命であるメッカへの聖地巡礼であった。3か月前、父と先生が夢に現れ冒険の天恵を与えたのである。そして彼は3人の同行者と8人の奴隷、15頭の馬とともに旅立った。イスタンブールからメッカへの旅はおよそ100日（+悪天候などによる遅延）であったが、彼はアナトリアの未踏の地を西へ東へ訪れ、到着には2倍の時間がかかった。

エヴリヤは二度と首都イスタンブールへ戻ることはなかったが、その後オスマン帝国第二の都市カイロに拠点を置いた。「旅行記」は彼のエジプト冒険、そしてその先へ……という内容で話を締めくくっている。その中ではカイロとイスタンブールの比較も行っている。（?）

1672年、ナイルデルタの調査旅行において、エヴリヤの語ることに、彼は気づけばナイルの河口の沖合で小舟に乗っていた。そして川の源流まで旅をしようと祈りをささげた。彼はその難しさについては警告を受けていたが、それをものともせずに出発した。……というようなことがオスマンのエジプト支配者 彼は青ナイル、センナールの南にあるとされる cersinqa と呼ばれる謎の土地に到着した際、「月の山」が現在はポルトガル人に支配されておりアクセスすることができないことを聞いたと書き残している。そして夢が彼に帰還を促した。バチカン図書館に保管されている5.5メートルの荘厳なナイルの地図が、「旅行記」のほかにエヴリヤの残した唯一の作品だといわれている。彼は最晩年をカイロで過ごし、そこで息を引き取ったとされている。

『旅行記』（*Book of Travels*）は、エヴリヤの時代のオスマン帝国文学の流れ(context)の中で唯一無二のものです。彼は、ぶらぶらと歩いたような詳細な説明を残していることが知られている唯一のオスマン人です。しかし、当時の他の人の著作は、たいていジャンルの中に収めることができます。つまり、エヴリヤの著作は簡単な分類を無視したのである。それは、歴史と地理、世俗的な建築や神聖な建築（教会など）の両方、植物、音楽、言語学、医学、民俗学と民族誌、地元の社会的および文化的な慣習、生産と食糧、そしてエヴリヤが聞いたことや目撃した奇跡的で漫画的な出来事を含んでいた。それはまた、移動に費やされた人生の深い個人的な記述です。現代の旅行記では、著者が訪れる場所を犠牲にして自分自身にこだわっていることは、しばしば、本の良さに光を当てるというよりむしろ厄介である。対照的に、エヴリヤは、彼の主観だけを取り上げることはなく、旅行記において一人称で語っていることは、読者のために彼が発見しているあらゆる物に関する彼の解説を決して外へ押しのけるわけではない。

エヴリヤの語りのスタイルは、彼の旅行と同じように楽しく放浪しているものであると言うことができます。その旅行記は多かれ少なかれ標準的な体裁に従っているが、頻繁に主題から離れることは、彼と同時代の作家の著作に欠けている豊かさを与え、それは、彼らが対抗することができない方法を受け入れ、その方法に従事している。『旅行記』は他の理由でユニークである。というのは、『旅行記』はしばしば、パルテノン神殿だけでなく、他の多数のものも含む、もはや現存していない建物について私たちが持ってい

る唯一の証拠であるからだ。彼は、社会的な領域の両端に、特に彼の旅館の主人や彼が必ず訪れることにしていた地元の聖人の聖堂など他の場所に痕跡が残っていない人物についても記述している。彼は記録のない豊かな地元の習慣を描いており、激戦地からの彼の「戦争報告」(war reporting)の臨場感は、他のオスマン帝国の文学作品にはそれに対応したものはない。

何よりも、エヴリヤは「人々の歴史家」(people's historian)であり、他のオスマン帝国の作家は、彼らと途中で会った人に興味がありませんでした。トルコでは、少なくとも、彼は、彼がかつて訪れた地域に住んでいて、過去との繋がりに誇りを持つ人々に尊敬されている。私と何人かの友人で 2009 年から 2011 年にかけて彼の 1671 年の巡礼路の最初の部分を乗馬と徒歩で旅したとき、何世紀も前にエヴリヤが自分たちの町や村について書いたことを地元の人々が知っていたことに私たちは、驚きました。

合理的な説明を無視する出来事に対する「驚異と不思議」(marvels and wonders)は、エヴリヤを大きく魅了しました。アナトリアでは、彼は、「Adana (訳者註：トルコ中南部の都市) のカボチャのように、あるいは Van(訳者註：トルコ東部の都市)のキャベツのように」、頭が大きく腫れた子供やインドの支配者によってオスマン帝国のスルタンへの贈り物として送られる象によって持ち上げられて食べられ、胃の中で 3 時間過ごした後、妊娠した少女を見た。その後、その少女は地元の役人によって殺され、エヴリヤは彼女の死体も見た。ハンガリーでは、彼は、ロバに変わったタタール人の若者を見ており、エジプトでは、彼はワニとセックスした男性についての話を聞いた。

そのような逸話は、エヴリヤの時代の社会でよく知られている口頭の話を集めたことから得られたものかもしれないが、この話は、本の中で効果的に展開されている。彼が物語をもっと活気に満ちたものにする必要があると感じたとき、これらの人間のドラマは、もちろん、エヴリヤ自身が夢見てきたものもあり、読者を楽しませるために装飾されている。彼が日常的なもの、つまり身近なものをさりげなく頻繁に言及しているおかげで、読者が、彼が何を描写しているのかをより簡単に想像することができる。野菜はハプスブルク皇帝を描写するときに、「鼻は Morea (訳者註：ペロポネソス半島の別名) の茄子のようであり、指はイスタンブールの有名なマーケットガーデンのキュウリに似ている」というように好んで用いられた。エヴリヤはユスティニアヌスのハギア・ソフィア大聖堂、すなわちアヤソフィア大聖堂に何度か言及している。また、例えば、ブルサのスルタン・バヤジット 1 世のモスクは「ブルサのアヤソフィア」と紹介している。都市のモスクの数を列挙するにしても、ほら話で読者を楽しませるにしても、エヴリヤは、彼の時代の文学的形式、すなわちそれらが指示するだけでなく、楽しませる作家に必要な物にも忠実である。彼の虚構は、今日の真剣に読んでいない読者と同じくらい、同時代の人々には明らかだっただろう。

エヴリヤは旅行家として誰よりも多くの地へ赴きその記述を残した人物であった。そんな彼も自然条件には苦しめられさらに土地によっては危険が多く潜んでいたため常に身の安全を案じていた。

イスラムにおける文化層の統合およびエヴリヤが旅した多くの地でのオスマンの民による統治はさておき、今日大抵の人間にとっては、彼が訪れた地は、ボルネオの密林と同じくらい読者にとっては珍奇に見えたであろう。彼の時代遠くへ脇に逸れる者はほとんどなかったけれども、エヴリヤ・チェレビは、自分のすべきことをしながらも、頻繁に帝国を行き来し危険を冒しても境界の外へ超えてゆく唯一の人物であ

った。巡礼者、商人、徴税人、軍人、官僚もみな広範に旅したけれども、知る限りではエヴリヤと比較してこれほどの報告を集めた人間はいなかった。

今日我々は「間」に何が存在するかということを顧みなくても目的地に到達することが可能である。だが、かつての旅行者はある種の「empty quarters（ここでは自然地形と意識しておく）」を無視することはできなかった。それは例えば海、草原、森林、砂漠などである。加えてそれらは自然の力とは独立したものではなかった。エヴリヤも、1641年の最初の長い旅行から戻る際に黒海で嵐にあい半ば致命的な難破を経験したことで（彼は鬼気迫る様子でこの恐ろしい話を話しているが）、長い間航海を延期した。しかし、彼がメッカへ聖地巡礼をした時、キプロスを訪れなかったとは考えられない。彼はアナトリアの南海岸から乗船し結局彼の船が開水域に到達してすぐ3艘の異端の船に攻撃されてしまい彼がその島を見ることはなかった。Nogai や Kalmucks や Circassians のようなユーラシア大陸草原に暮らす民族の土地を抜ける彼の旅は略奪者や一見したところでは人喰い人種による危険に満ちていた。それは、およそ金角湾と同じくらい広く深いというクバン川の河口に広がる裂けた氷の上を渡る時の尋常でない寒さと死を悟るような肝を冷やす体験にとどまらないものだった。森も反徒のみならず盗賊にとっても絶好の隠れ場所だったため、エヴリヤは数え切れない状況においてそれが安心できる場所の近くであっても身の安全を案じた。ナイル川沿いの砂漠は、特に多様な野生動物がこの上ない恐怖だったが、エヴリヤは狩りに出る3日間はそんな恐怖も取り払ってそこで一行はヒョウやキリンのみならず70頭の象と16頭のサイも仕留めたのだった。

エヴリヤの旅行記はどのように受容されたのだろう。18世紀半ばに愛書家アガの功勞によって複製されようやく世に出回った。しかしその後は欧州においてはあまり注目されなかったり、トルコにおいては検閲によって改変をうけたりと、不遇の扱いを受けていたが、近年、完全版が出回り始めたことによってようやく風向きが変わってきており、大衆・学者双方から注目を集めている。この傾向が続けば研究はより発展し、大衆にとってもオスマン帝国人の視点による異国の旅行記は良きエンターテインメントとなるだろう。

エヴリヤは誰のために記していたのだろうか？「旅行記」における様々な部分で、彼は旅のモチベーションや、彼の見たすべてのものについての文章を残している。そして我々が考えるのは彼の想定読者層は教養あるオスマン帝国の同僚たちである。とはいえ、ことは彼の想像通りには進まず、彼の原稿は1742年にエジプトにゆかりのある黒人宦官長アガ（トプカプ宮殿のハーレムの監督官、アフメド3世とマフムド1世の治世のとき）へのプレゼントとしてイスタンブールに送られるまでカイロで私的な手により衰退していた。

アガは愛書家であり本を受け取るとすぐに複製を作らせた。原本の大半と多数の複製本が現存している。初めの二冊はイスタンブールとエヴリヤの最初の冒険について書かれたものだが、1834年と1850年にオリエンタリストであるプルグスト氏によってヨーロッパで刊行されている。19世紀中ごろにはイスタンブールの巻からの短い抜粋が元のオスマントルコにおいて出版されたが、その時は完全版を出版するほどの価値を認められることはなかった。

完全版を出版する最初の機会は19世紀の末に訪れた。しかしこれはアブデュルハミト2世の治世の間であって、彼は自分の安全と帝国の存続にひどく気をもんでいた。彼は検閲部隊を登用して、思想の自由

を助長する可能性のあるものを徹底的に抑圧した。「旅行記」の完成版は、ローマ法王の禁書目録のごとく、宮殿の指令を踏まえてひどく検閲が加えられた。例を二つあげるなら、エヴリアの財産の総額や、イランでの拷問道具の描写である

エヴリアの原本や複製本を入手できた少数の幸運な学者をのぞいて、この非常に不満足な出来の旅行記が100年以上もの間史料としての扱いを受けていた。しかしながら、1996年から2007年の間に、旅行記はオスマン帝国時代の表記から現代トルコ語表記（アルファベット）へ書き直され、今ではこれが決定版となっている。エヴリアの言葉遣いは今日のトルコ人にとっては非常に難解なので、現代の言葉遣いに直されたものも出版されている。肉筆の原稿のかたちでそのまま出版する計画も進んでいる。さらに、抄録も様々な言語で、大衆向け/アカデミック向けともに出版されている。2010年には全体の抄訳版も英語で出版された。

エヴリアの一番の理解者は、人文学者たちのこれまでの「旅行記」へのアプローチを「ちょうど無数の未接続の小道のある巨大な鉱山のように……彼らはテキストから問題提起し、求めた鉱脈を発見し、鉱石を引き抜き、他の物は置きざりにしていく。」ようなものだと捉える。エヴリアの大事業が権威ある形で出版されることは新たな時代の幕開けとなるだろう。今や我々は作品を本人の意図した通りに眺めることができ、エヴリア研究は真剣に開始されるだろう。いつか彼の傑作の全文が英語に翻訳される日がくればより多くの人々が、なじみのない世界を最高の旅行者の目を通して見る幸福を享受することができるだろう。

500 年前ドイツの人里離れた地域の人目につかないような町で聖アウグスティヌス修道会の修道士が首尾よく始めた一連の出来事は、後に西洋の全キリスト教徒を長くにわたって巻き込むに至った。ヴィッテンベルグの城の教会の門に自身の『95 カ条の論題』を投函したマルティン・ルターの話はドイツ史において明確な時機である。しかし、宗教改革に向けたルターの活動の起源とは何なのか？ヨーロッパという地においてヴィッテンベルグから彼の抗議を推し進めた個人や出来事を我々はどのように理解すべきなのか？そして、当時の関心事の文脈においては宗教改革の重要性をどのように説明することができるのか？

9 人の兄弟の長男であったマルティン・ルターはマンスフェルトの国のアイスレーベンで 1483 年 11 月 10 日に生誕した。彼の生まれは比較的身分が低かった。「私は小作人の息子である。曾祖父、祖父、父はれっきとした小作人である。」と後の生涯で述べているが、これは誇張であった。彼の家族は、もとは小作人であったが、彼の父であるハンス・ルターは地元の鉱業の先達になり長男に法学を学ばせようと思っていた。ルターはマグデブルグとアイゼナハの学校に通い、1501 年エアフルトの大学に入学するとそこで 1505 年に修士の学位を獲得した。彼は研究を続けるのではなく、町のアウグスティヌス修道会の修道院に入った。この方向性の変化を反映してか、ルターは宗教改革以前の信心の本質に関する見識について話すようになった。エルフルトへの道中雷雨にあって、ルターは鉱夫にとっての聖人であり後援者の聖アンのもとを訪ね、彼女は助けになってくれるけれども修道士としての人生を過ごすとは誓ったのである。中世後期のヨーロッパでは聖人は守護者や後援者として扱われ、天と地の間に立つものであった。この聖人としてふさわしき交わりという考えは、ルターのようなプロテスタントの改革指導者を排除しようという伝統的宗教の多くある側面のうちの一つになっていった。

ルターは厳格な修道院の規律にさらされたが彼の人生設計に大きく関わる人物の一人であるドイツアウグスティヌス修道会の司教代理を務めるヨハン・フォン・シュタウピッツに出会い、彼はルターが悩みを告白できる人物であった。これは容易なことではなかった、というのも若き日のルターは長きに渡る魂を探す冒険に傾倒していたからである。彼は人生を通して反駁（誘惑もしくは信仰との戦い）に悩まされた。しかし、彼は聖職者の階級を急速に上げていった。1507 年には司祭と定められ、1 年後には一時的に教授職を埋め合わせるためにヴィッテンベルグに派遣され、1510 年にはローマを訪れ彼は後に偽キリストの本拠地だと述べた。1511 年にはヴィッテンベルグに移り 1512 年には神学の博士学位をとった。

選挙侯のザクセンにあったためか、ヴィッテンベルグはヴェッティン王家のアーネスティーン分家が支配しており最近になって大学ができた。ルターが来た時は、街は支配者の選挙侯賢者フレデリックによりまさに再建されており、彼は大学を政治的文化的権力の中心に変えることを決めていた。これは幸運な状況であった。急速に発展してゆく町の州立大学に呼ばれ、ルターは比較的自由に大胆な考えを展開することができるようになった。彼はシュタウピッツから聖書研究の教授を引き継ぎ聖書に関する講義や神学の議論に時間を費やすようになった。1514 年からは教区の牧師にもなった。彼の書籍を分析すると神学における彼の洞察の鍵（彼を宗教改革へと駆り立てた考えの要点）はこの時代経過の中で構築されていったという。（彼の所見の後々の解釈のように用を足して座っているときに神霊が舞い降りて来たというのではない。）

スコラ神学の批評を出版したすぐ後、1517 年にルターは、贖宥状に対する『95 カ条の論題』を書き、（恐らく）ヴィッテンベルクの諸聖人教会の扉に釘付けにして、それを（確実に）神聖ローマ帝国の最も有力な聖職者であるアルブレヒト＝フォン＝ブランデンブルク（Albrecht of Brandenburg）大司教に送った。（Michael Mullett の『95 カ条の論題』を見ると良い。）その日付である 10 月 31 日は重要であった。その日は、ザクセン選帝侯フリードリヒの聖遺物のコレクションが諸聖人教会で一般に公開され、あちこちから巡礼者を呼び寄せており、「諸聖人の日」（訳者註：カトリック教会の祝日の一つで、全ての聖人と殉教者を記念する日）の前日でした。ラテン語の論文を投稿することは、一般に公開することにとっては限られた意見ではあったが、通常、学問的議論への招待であった。しかし、ルターがこのような議論を起こそうとしていたかは明らかではない。というのは、彼にとって、重要なことは、挑発的な手紙を添えて『95 カ条の論題』をアルブレヒトに送ることであると思われる。そして、ドミニコ会の修道士であるヨハン＝テッツェル（訳者註：ドミニコ会の修道士で、16 世紀前半、ドイツで免罪符を配布・販売した中心人物の一人である。）が彼の代わりに近くのマクデブルク（訳者註：ドイツの都市でザクセン＝アンハルト州の州都）で贖宥状を売っていました。しかし、『95 カ条の論題』は支持者を生み出し、ニュルンベルク、バーゼル（訳者註：スイスの都市、バーゼル＝シュタット準州の州都）だけでなく近くのライプツィヒ（訳者註：ザクセン州の都市）で再版されました。ルターの教会に対する批判は、少なくとも近代ヨーロッパ初頭のラテン語を扱えるエリートの間では、公的な問題でした。

なぜルターの『95 カ条の論題』がこのような騒動を生み出したのでしょうか？ なぜこの瞬間が宗教改革の始まりとなったのか？ 『95 カ条の論題』は、十分に発達した神学プログラムではありません。その代わりに、それらは、罪によって得られた懲罰からの赦免である贖宥状の販売を実際に行っていたことに対する攻撃であり、死者の魂への権威に対する教皇の主張の批判です。それらは、福音の説教とキリスト教徒の生活への反論の必要性を主張している。というのは、私たちの主イエス・キリストは、「汝、悔い改めよ」と言いましたが、キリストは、信者の全人生は悔い改められるべきだと命令したと最初の論文を述べています。ルターは牧師としてその論題を書き、キリスト教徒の魂が教皇のとりなしの下に置かれていることを心配しています。彼は、贖宥状の行商人によって作られた無意味な約束によって教皇は欺かれていたと考えました。シュタウピッツ (Staupitz) は 1516 年の説教で贖宥状を非難し、聖職者の搾取に対するルターの攻撃と教皇の権威に対する彼の挑戦は、中世末期の「教会」へ対する長期間行われていた批判の伝統を続けました。

1980 年代から宗教改革の歴史は、ルターの重要性を相対的なものにしがちであり、彼の中世における神学的洞察の起源、欧州全体で起きた改革のための多かれ少なかれ同時に発生した要求の多様性、そして、宗教改革が展開された政治的および社会的背景の重要性を強調していた。確かにルターのメッセージの要素はよく知られていた。彼の考えを受け入れる土壌は、長年の教会の富に対する憤り、特に教皇の財政的および精神的な搾取や神聖ローマ帝国に対する憤りによって準備されていた。しかし、俗人の宗教生活は、宗教改革の直前においても盛んであった。具体的に言えば、男性と女性は結婚に参加し、聖廟への巡礼を行い、教区教会にお金や芸術作品を寄付しました。伝統的な教会（カトリック）から離れることを誘発するものは何であっても、それは信仰心が欠如しているわけではありませんでした。しかし、ある程度の不満、つまり改革のために繰り返し行われてきた要求がほとんど達成されていないという認識がありました。これらの要求のいくつかは、異端として、特にロラード派（訳者註：ウィクリフの教えを発展させ、カトリックの改革を要求した人々）とフス派と名付けられた集団から来ていました。他のものは、宗教改革の際の俗人の運動であるデヴォティオ・モデルナ (Devotio Moderna) やキリスト教的人文主義といった教会内で生き残った宗教改革のための運動から来たものである。

フス派は特に関連性が高い。ボヘミアの聖職者であるヤン・フスは、イギリス人であるジョン・ウィクリフから刺激を受けたように、贖宥状を攻撃し、聖職者の罪と墮落を非難した。(Richard Cavendish のウィクリフの短い伝記を読みなさい) フスは両方の種類の聖体拝領（訳者註：ミサの時、キリストの体であるパンや葡萄酒を口にする）すなわち、聖体拝領のワインであるキリストの血は、聖職者だけでなく信徒にも与えられるべきであると主張し、福音を伝道することの重要性を強調しました。チェコの歴史の観点からみると、1517 年のヴィッテンベルクを宗教改革の始まりとして位置付けることは挑発的な行為です。というのは、近代初期の最初の宗教改革を成し遂げたのはルターではなく、フスであるからです。(フスについては Frantisek Smahel を見なさい。) フスは 1415 年にコンスタンツ公会議で有罪判決を受けて火刑に処されており、その後ボヘミア王国は 10 年半にわたり宗教戦争に苦しんだが、フス派の運動のより穏やかな翼は 17 世紀になっても生き残った。ルターと彼の支持者たちは、フスを真の教会の歴史として選出しました。フスは死ぬ前にルターが来ると預言したと考えられていた。すなわち、あなたは今、ガチョウを炙り焼きにしていますが、(フスはチェコ語でガチョウと言う意味である) 神は、あなたが焼いたり、炙ったりしない白鳥を目覚めさせます。ルター自身は 1531 年にこの預言を引用し、彼のヴィッテンベルク大学の同僚であるヨハネス・ブーゲンハーゲン (Johannes Bugenhagen) は 1546 年に改革派のために説いた葬儀の説教でそれを呼び覚ました。後の肖像画では、ルターは、時々フスのそばに立っている白鳥の姿として描かれていました。

フスは、初期の福音教義の唱道者であり、彼に先行するプロテスタントとして、宗教改革の歴史に同化された。ルターのエラスムス(北欧最大の人文学者)との関係はさらに問題になっている。エラスムスはルターによる教会批判を予期していた。彼より前の 15 世紀 Devotio Moderana の賛成者として。どちらもキリストに主眼を置いた信仰の形を主張した。1503 年に彼の出版した handbook of Christian knight では、エラスムスはクリスチャンとして生きるためのマニュアルを提示して、教会による表面的な儀式に拘るのではなく、内面的な、個人の信仰心や祈り、聖書の勉強を重視することを説いた。彼は他の著作において当時の神学者、或いは聖職者のヒエラルキー、或いは一般の信者の軽蔑に対する辛辣な批判を行った。神学者(彼はスクールマンと呼んだ)は抽象的なことについて考えることに時間を費やし、聖書の勉強や教義の伝道を疎かにしている。聖職者たちは世俗の事情、金や戦争、で頭がいっぱいで群衆をネグレクトしている。エラスムスが 1511 年に the praise of folly において嘆くことには、「教皇は自らキリスト教を腐敗させている(大意)」。

エラスムスが1516年に出した、ギリシャ語とラテン語を併記し、訳注を散りばめた新版の新約聖書である *novum instrumentum* はこの時代の知性の到達点の一つである。それはルターのドイツ語訳の基礎となり、19世紀に至るまで聖書の学問に使われていた。エラスムスはカトリックの論者によって、宗教改革の在り方を形作り、ルターの孵した卵を産んだことを責め立てられた。彼の、ウィットに富んだ返答は次の通りである：ルターが孵した卵は別の鳥のものである。この2人の宗教改革者の最終的な決裂は、自由意志に関する論題による。エラスムスにとって、自由意志は人間が神に近づくことも遠ざかることもできる力であると説き、しかし神の不在や罪深い行いに向かうことは否定した。しかしながらルターにとっては、人類は樂園追放以降は自由意志を失った。人類は罪業に囚われ神の慈悲なしでは何事も達成できない。この二人の決裂は世間に知られ、修復も不可能であり、しかし次のことは疑いがない。帝国の一定の部分、例えばニュルンベルクにおいて、人文学者は初期において重要なルターの賛成者であった。

神聖ローマ帝国の中で、人文学者と福音主義者は、教会の暴力に対する批判的態度、文献に対するクリティカルな目線や聖書の研究の重視だけではなく、初期のナショナリストの感情についての態度において、共通の背景を見出した。帝国は政治的、文化的にバラバラであったが、しかし15世紀には、ローマと対照するものとしてのドイツ人という共通した意識が芽生えていた。教会の改革についての皇帝への要請は世紀を通して響き続けた。cusaの神学者ニコラスの文書や匿名による *reformation of emperor sigismunt*(1438)からそのことが窺える。そして16世紀には広くでまわり、ドイツ人のローマ教会に対する不満、それらは帝国代表議会において議論された。

15世紀の半ばから。教会の代表者の要求つまりはドイツ人バージョンへの要求は声高に叫ばれ、数十年の間に約1500人の人文学者が反ローマに関して声を上げた。人文学者ハインリヒが言うことには、美德と信仰を持つ私たちは他のどの国々よりも偉大である。アルリッチという Franconia の貴族がローマに対して最も声高に批判した。ドイツの nation は、彼が言うことには、教皇によるお節介よって自分たちがどれほど酷く引っ掻き回されたことか理解している。他の人たちは、全キリスト者による共同の改革の遂行を主張した。

これらの理想は全て幻想だった。15世紀の改革者はドイツの教会が構成員の要求や天意に叶うことのさらなる気配りが足りなかった。教会の長きにわたる批判や再三の改革への呼びかけによってルターの95ヶ条の論題が受け入れられる素地が出来上がった。しかし、それらでは彼の運動が予想外に成功したことを説明できない。これを説明するため、我々はルターを振り返る必要がある。彼の伝記を書いた Lyndal Roper が近年かなり注目すべきものとして示したように、ルターを英雄というには難しい (Roper の伝記の Elaine Fulton の項目参照)。彼への嫌悪や近世への深い追い出しという側面、自由の感覚がある。彼は偉大な嫌悪者で、彼の反ユダヤ主義それ自体が、彼が明白に、圧倒的に、最も運命的に憎んだものであった。ルターの1543年の「ユダヤ人と彼らの嘘 (On the Jews and their Lies)」と「キリストの言うに言われぬ悪口世代 (On the Inefabable Name Generations of Christ)」の2冊の冊子は当世の基準の中でも極めて辛辣だった。ルターは頑固でもあり、彼の晩年には、権威主義者をたいそう惨めに扱った。しかし、彼の功績と信念、コミュニケーション能力や大衆の関心を生み出す力は間違いなく宗教改革を前進させた。

これらの質は初めから明らかだった。1518年、ルターは教皇の関係者の Cajetan 枢機卿に謁見するためアウクスブルクに呼び出され、1519年には彼とヴィッテンベルクの仲間の Andreas Bodenstein von Karlstadt は Ingolstadt 大学学長代理の Johannes Eck とライプツィヒで議論した。この対面の中でルターは考えを発達・磨き上げた。Cajetan への返答の中で彼は「信仰のみがキリストが正当化した言葉であり、今でもあるもので、人間に価値や心構えを与えるものだ。その他のものはでしゃばりか絶望の中での行動に過ぎない」と信仰が救済自体にどう依存しているかに対する理解を要約した。この信念は彼の理論の中心に光明を与えた。彼は1518年から1519年にかけて、彼の大衆に訴えかける技術を示したりもした。アウクスブルクにて、彼は公証記録行事を開き、ローマに自分の主張を再提出して大聖堂のドアに文書を残した。彼は続いて第1版を出版した。ライプツィヒでは、ルターはうまく議論で活躍しなかった-Eckに完敗した-が、彼の信念は彼に前進を強いた。もう一人のヴィッテンベルクの仲間である理論派の Phillip Melanchthon はルターと Karlstadt のためライプツィヒの討論の内容を出版した Michael Mullet の Melanchthon と他の改革者の役割を参照)。

ルターは無精にも破門に向かって行動し、フスと同様に殉教への道に向けて前進していた。「彼らが力をつけ上げれば、私はますます気をつけて笑おう」「私は何も恐れないと決心している」と彼は1520年1月に記している。彼が出版を続ける間、教皇の権威への攻撃と同時に、素人の信者に向けてドイツ語に加え話し言葉で福音信仰を書くには年月は短かった。教皇は1520年6月にルターの破門の話が広まると強気だった。Exurge Domine (おお現れよ、主よ)と題されたもので、教会に主のブドウ園を侵入し

てきた猪から守ることを呼びかけた。一方、一時的にルターの支配者だったザクセン選帝侯フリードリヒは主要な理論派や教授がドイツの教皇の代弁者に降ることを拒み、彼を守った。12月10日、注意深く準備された行事で、ルターは強気な教皇の様々な教会法や理論書をヴィッテンベルクで燃やした。1521年には芸術家でルターの友人兼同盟者のルーカス・クラナッハがキリストの行いと教皇の行いを比べた13枚の木彫の「キリストと反キリストの受難 (Passional of Christ and Antichrist)」を出版した。それは宗教改革の最も効果的な宣伝手段の一つで、何度も再版された。ルターは完璧にローマから離反したが、我々はこの点において、彼がまだ新宗派を作ることより、カトリック教会の全般的な改革を達成しようと考えていたことを心に止める必要がある。

1520年、ルターは3冊の重要な小冊子を出版した。8月に出された彼の「キリスト教徒の階級改革に関するドイツのキリスト教徒の高潔さ (Address to the Christian Nobility of the German Nation Concerning the reform of the Christian estate)」は最初かつ最も人気の作品だ。ラテン語でなくドイツ語で書かれ、「私たちには名ばかりの帝国があるが、教皇は私達の富、名声、体、命、魂と我々のすべてを握っている」と軍隊に呼びかけるものだった。ルターは「高貴な王子や紳士たちよ、どれだけあなた方は領土や住民を略奪的な狼の獲物として苦しめるのか」と書いている。ルターの言及通り、総評議会は教会の改革に失敗しドイツ皇帝にとって困難を乗り越えることが当時の義務となっていた。世俗のキリスト教徒の力は、世俗を超えた霊的な力が崇高だということ、教皇のみが聖書を解読できるという信条、教皇のみが教会の評議会を招致できるという主張という教皇主義が自己防衛のため築いた3つの壁を破壊したに違いない。ここにおいてルターはすべてのキリスト教徒が心霊的には平等であるため、司祭やすべての人はキリスト教社会の改革について責任を共有する必要があると主張した。指導者、ドイツ国家の国民は教皇に対し「耐え難いほどの重税と略奪から国を解放し、自由、権利、財産、名声、身体、魂を返せ」と強いたに違いない。

「教会のバビロン捕囚 (The Babylonian Captivity of the Church)」という2冊目の小冊子では、ルターは中世教会が恩寵を信者に与えることと主張した形式である秘蹟（注：目に見えない恵みを仲介する目に見える印）に関する教えをきちんと説明した。ルターはその数を7個から聖餐式（注：ミサで聖体（パンとワイン）を与える儀式）と洗礼の2個のみに減らした。これらだけが聖書によるもので、パンとワインまたは水という目に見える印と罪を赦すことを約束することを含むものだとは彼は主張した。しかし最後の晩餐や聖餐式としても知られたものは、福音派の運動が作り上げた連合が堅固な支えの一つであることを証明した。それは改革者が和解できない気性や公衆の理解の違いをもたらした。すべての福音派は大衆に対し伝統的なカトリックの教えを授けることを拒んだ。それはもはや司祭の奇跡、良い働き、キリストの受難を反復することとしては理解されていなかった。司祭が奉獻の言葉を発したときにパンとワインがキリストの血肉になったという信条である実体変化は非難されたが、その場にあったものは論議された。

ルターにとって、キリストは聖餐式においてあくまで物理的に現れた。キリスト教徒はこれがどう生じたか理解する必要はなかった。信者は異端にならないため「これが私の肉体だ」という約束のため「キリストの言葉に単に拘る」必要があった。他の改革者はキリストが実際に存在したことをもみ消し、聖餐式に関する心霊的なさらなる理解を生み出した。Huldreich Zwingli やスイスの改革者にとって、聖餐式は原則として記念祭の形式であった。このことはキリスト教社会の中心の儀式であり、平信徒の改革の経験の鍵となる部分である聖餐式の決まりを決めるということで、一見曖昧な議論こそが重要な結果だとして祝福された。ルター派の領域の中では、精巧な礼拝服、祭壇、祭壇上部の飾りや聖餅（注：聖餐式で使うパン）、ラテン語の使用といった点で、最後の晩餐がキリスト教徒の集団に似ていた。しかし、スイスやカルヴァン派の改革後の教会では簡素な机が祭壇の代わりに、パンが聖餅の代わりに、その土地の言葉がラテン語の代わりに取って代わった。

1520年代後半、「キリスト教徒の自由」の時代の時にルターの教皇に対する批判はさらなる段階へと移った。天国の下の大広がりの中に、ローマのクリア（政治、軍事を担当した部族単位）より破壊的で邪悪で攻撃的なものなどいないというのは真実ではないのですか、と。しかし、彼は未だ教会評議会が再建可能であると信じていた。この期間、彼は真のキリスト教徒としての人生の理解を強制するよう書き記した。「キリスト教徒は権力者から完全に自由な存在であり、何人たりとも支配されない。キリスト教とは誰しもが完全に奉仕の義務がある。」信者は神との契約によって罪から解放される。「契約は勤労や正義、自由や儉約から独立している。」しかしまた、信者は隣人愛の義務がある。創造の時代に書かれたこれらの三つのルールはルターの再建の軸となった。それは聖書の権威に着目しており、キリスト教徒の平等と魂の平等を拠り所にした権力に対抗していた。もはやその権力はローマ教会を脅かすものであったのだ。

1521年、ルターは皇帝チャールズ5世に召集され、帝国国会にきた。ルターはすでにレオ10世にすでに破門されていたが、教

皇の俗世の対抗勢力であり、西洋で最も力を持っていた君主からも有罪判決を受けた。95ヶ条の論題を出した以上に、ラインラントに現れた時がルターの改革において重要な局面であった。ルターと彼の同胞たちはウィッテンベルクから西へと旅をしながら10日間を過ごし、道中では熱狂的に歓迎されていた。再建者がウォームへと到着した時には約2000人もの人々が道に集まるなど、民衆のルターへの関心が伺える証言もある。4月17日に彼が国会に行った時には、人々は彼を見るために屋根に登ったりもしたのだ。彼の来訪は日曜日にキリストがエルサレムに入場した伝説になぞらえされさえした。こうして黒い祭服を身にまとった彼はたった一人でとてつもない権力、帝国の光と対峙した。彼の目の前に本の山が突き出され、これらは彼の著作なのか、またそれらを撤回するかどうかを尋ねられた。彼は返答を引き伸ばさせてもらえよう求め、後日再び現れた時に熱弁を振るいながら撤回することを拒否した。そして最後に「私は聖書に書かれていることが理論的な説明でない限り納得しない…。私は自分のまとめた聖書を頼りにしていて、私の意識は神の言葉のみに向かっている。」と述べた。その後彼の支援者たちによって出来事について簡単に書き残されたことには、「私がなすすべのないときは神が助けてくれる。」とルターは言い加えたという。

ウォームでの出来事は神学に関わる人々に広く伝わり、ドイツの教会の再建につながった。世俗の皇帝と帝国内の教会の土地所有に反対した彼の態度は、彼の存命の時分でさえ、伝説になっていた。彼はヒーローになった。再建者としてのイメージは循環し始め、この顕在化した特筆すべき反乱への興味を落ち着かせた。1521年に「キリスト教徒と異教徒の情熱」という作品を作ったルーカス・クラナハは象徴としてのルターの像を形成する上で重要な役割を果たした。まずは彼がまだ修道服を着ている姿を描き、その後医者として、また説教者として黒い服をまとっている姿を描いた。ルターはしばしば聖書を持った姿で描かれる。彼の敬虔な態度を示すために、精魂を表すハットが伴って描かれることもある。ストラスブールのハンス・バルドゥングが1521年にルターを描いた木版画には、ハットだけでなく後光も描かれている。

彼の登場とウォームの国会での行動によって、この初期信仰はさらなる弾みをつけた。ルターのキリスト教徒としての精神に関わる裁判をまとめた小冊子は広く流通し、ただ磔にされて終わるだけでなく改革に関わる本まで燃やされてしまった。肖像画は聖書とともにそれらの本のそばに置かれた。「これは教義を伝えたマルチン・ルターです。」本が灰になっていく中、肖像画だけは燃えなかったという。これは「不燃のルター」伝説の始まりであった。これは18世紀になって再び語られるようになり、神の使いとしてのルターの評判を一層高めるものとなった。他の福音の宗派ではこのように聖人伝としてその創始者を崇拜することはなく、また1520年代に生まれたルターのドイツのヒーローとしての像は20世紀に入ってもなおドイツのプロテスタントに重要な意味を持っていた。

1521年4月26日にルターはウォームを後にした。帰路にて彼はフレデリックの臣下たちによって「誘拐」された。一事実フレデリックは彼の安否を気にかけており、保護したのであったがー5月8日チャールズ5世はルターを破門しており、それは今でいう無法地帯に置かれたようなものであったから、彼はフレデリックの保護のもとでようやく身の安全を守ることができた。彼はアイゼナハのヴァルトブルク城に連れてこられた。この期間、肉体的精神的に傷を負ってはいたものの、ルターにとっては実りのあるものだった。この期間にルターは2つの重要な偉業を成し遂げた。彼は修道士としての自らのあり方に最後の別れを告げ、新約聖書をドイツ語訳し、それを1522年7月にウィッテンベルクにて初めて出版した。ルターは1522年から1534年にかけて全ての聖書を翻訳した死の直前まで訂正を続けたのだが、それは学術的文化的両面においてドイツ宗教改革の重要な産物となっている。

ルターがいなくなってからウィッテンベルクでは急速に業績が生まれていった。クリスマスにカールスタートでは聖職者のローブではなく法律家の服を着て選挙での反対があったにも関わらず、城での信仰を祝った。更なる改革には次のようなものがある。ウィッテンベルクのアウグスティヌス修道士が教会の祭壇とその飾りを壊した。1522年1月に街の議会が法令を下した。ーこれは福音教会の初の法令であったーそれは礼拝式のあり方を変えて宗教的なイメージを固定化し、中途半端な信仰をなくそうとするものであった。そのような法令はドイツのプロテスタントを通して宗教改革に決定的な役割を担うようになり各地に広がっていった。

フレデリックは従兄弟のジオルゲにその地位を揺るがされ、政治的に不安定であった。ジオルゲはルターに対して命令を下すよう言われて1522年の5月にウィッテンベルクに帰ってきた。一連の流れは政治運動の基本的なあり方の一つであり、ルターはカールスタートではなくサソンの有権者と手を結んだ。彼はカールスタートにおける鍵となる宗教改革を改変した。ー伝統的な式典の活発化と偶像の禁止ーそれから説教の禁止。ルターが主張することには、改革のペースはゆっくりでなければいけないという。基本的な彼の神学観を完全否定していた保守派はその発展に伴ってルターの改革に太鼓判を押すようになっていった。ルターは政治的現実にして彼自身と運動のあり方を調整していく中で、同盟国であったカールスタートを1521年から1522年にかけての急

進主義の生贄とした。

マルティン・ルターは1546年2月18日に死去した。彼の教えによって神聖ローマ帝国では大衆にも王侯にも支えができそれは以後も続いた。彼が死去するまでには、北・東のドイツにある多くの自治体や街がルター派になり帝国を超えてスウェーデンやデンマークでも改革は行われていた。しかし、開祖の死はドイツのルター派にとっては危機なる時代の始まりであった。1546年から47年にかけてザクセン選挙侯のジョン・フレデリックとヘッセンの伯爵のフィリップ1世に導かれたルター派の王侯や街によるシュマルカルデン同盟は宗教的政治的独立を保つためにイタリアでの長きに渡る戦争から戻ってきたチャールズ5世と戦っている。ミュレンベルクの戦いで敗れると1548年には伝統的な教義を復活させることやトレントで1545年に教皇パウロ3世が招集した教会の一般評議会の結論を未解決のままにすることを意図して一時的な宗教合意を押し付けた。この合意は施行には不可能だった。ルター派はすでに根付いており一掃することはできず1555年にはアウクスブルクの宗教和議で帝国内で法的に認められるようになった。しかし、敬虔な人々を失わない必要性から危機なる時代の福音教会ではルターの後継者の間で生じた神学上の分断が深まり、それが回復するには30年もかかった。さらに、カトリック教会は次第に、それはある部分ではトレントのある部分ではイエズス会の働きによるものだが、帝国内でその立ち位置を回復した。重要な領域（特にバイエルン）では改めてカトリックの教義や慣習が確認された。ルターが1520年に計画したプランに沿って行われてきたドイツ教会の改革への彼の期待も道半ばとなった。

では、ルターの宗教改革の要点をどのように説明できるのか？95ヶ条の論題や後の彼の記述を通して彼は西欧の全キリスト教徒を長きにわたって導くような考えをもたらした（それでも今では教義上の和解が試みられている）。中世後期における改革の要請は時代背景を踏まえれば重要だったけれども、ルター自身が画期的で重要な人物であったことは間違いなからう。個人は聖書の権威に対する祈りによって首尾よく教皇に立ち向かえることを彼は示した。ルターの宗教改革は、明らかなように、中世後期の教会の体制全体が脆弱で時が来れば明らかにそしてあっけなく崩れ落ちるものだということを示したのである。

しかし、この発露の後に続いたものは宗教の自由でも信心の自由への移行でもなかった。実際には、本流のプロテスタントも宗教の多様性においてはカトリックと同じくらい受け入れられなかった。アウクスブルクでの1530年の告白やトレント評議会での決定、ウエストミンスターでの1646年の告白（名のつくものは少ない）のように、信仰に対する近代初期の主張では、教義上の通説が定義され教会組織の指針については示されなかった。ヨーロッパ中で、通説（すなわちプロテスタントとカトリック）は教育を通して広められたし、場合によっては迫害によっても遵守に至らせた。ルターは知らず知らずのうちに特定宗教の時代を開いてしまっており、この間ヨーロッパでは大きな宗教集団の分断があった。この特定宗教の時代を通して、宗教は戦争や宗教上の暴力を正当化したり先延ばしにしたりするようなものとなり、この影響は18世紀になっても続いた。1731年から1732年にかけてはザルツブルグのカトリック大司教が19000人のルター派を領域から追い出し難民として放浪させるまでに至った（結局選挙侯のベルリンのフレデリック・ウィリアムのもとに多くは引き取られた）。個人は寛容を主張しており、特にドイツやオランダ共和国のような一部のヨーロッパ地域では一般大衆が宗派が混在した共同体の中で宗教の多様性ととも生活できるようになった。しかし、宗教寛容の高まりは残念ながらゆっくりとした過程を経ており、今日でも完全と言うにはいまだほど遠いものである。

フランス革命以来フランス史は、前進を約束されたのに苦い失敗に終わるような時に焦点が置かれるようになった。1936年の人民戦線による選挙はその一例であると、ジョナサン・フェンビーは述べている。

ドーヴィル、ニース、その他のフランスの行楽地は、以前は休日を楽しむ上流階級のためにあったようなものだが、そこにいた彼らは恐怖の中にあった。列車の安い客室から降りてきたのは、海沿いに初めて遠出するような労働者の集団であった。場所によっては、これら新たな休暇人を歓迎しないことを明示した看板を掲げる店もあった。

80年前の国の近代史において非常に激しい時代、それはつまりフランスにユダヤ人が首相に就きと強い共産党の支持を受けた下手に血気盛んな政府が初めてできた時代だったが、その後にフランスを一掃するというのはまさに既存秩序に対する多くの挑戦の一つであった。人民戦線にいた人物たちは、1936年5月の総選挙をもって新たな時代に導かれると言って喜んだが、この選挙では社会主義者（SFIO）と共産主義者（PCF）と（名前に関わらず概ね穏健な）急進党員が57%の得票であった（投票は男性に限られた）。結果として、代議員の608議席のうち合計で386議席を獲得し変革への権限が彼らに与えられた。

ヒトラーがライン川を超えて権力を強めるようになった時期、フランスの選挙民は初期の革命に引き寄せられて共和国の価値に確実な一石を投じたようであった。新たな政府は労働者や前進的な中流階級のえも言われぬ喜びとともに迎え入れられた。7月14日にパリのthe Place de la Nationで行われた大規模な行進は、赤い服の背の高い青白い若い女性が黒髪を後になびかせながら団長を務めた。写真家や映画監督はこの解放運動の様子を記録した。第三共和制が右派や穏健派のもとで統治されるようになって6年と5年ほど経った後、左派は遂に1789年の約束を達成する機会を得た。人々の権利と自由・平等・博愛である。人間性の進歩の指標としてフランスにおける自称的ではあるが役割を果たしたのである。

失われた時間などなかった。73日の空白があって133の法律が制定された。大規模な公共事業プログラムも続けられた。鉄道・軍備・航空産業の工場の国有化も始まった。スト中の200万人の労働者は工場を占領した。パリ郊外のルノーの巨大な設備では、半製品の車の座席で眠り取り仕切りの管理者の職場には赤い旗を掲げた。

一刻の猶予もなかった。73日間で、政府は133の法律を制定した。大きな公共事業が始まった。鉄道や武器・航空機の工場の国有化が始まった。200万人の著しく多い労働者が工場を占領し、パリの端にある巨大なルノー工場では、製造途中の車の座席で眠り、社長室に赤旗を掛けました。

田舎の一部でも交戦状態になっていた。農家が小麦の適正価格を確保できるよう、穀物委員会が設置された。貸付金は中小企業にも拡大した。重要な社会的進歩があった。具体的にいえば、義務教育を終了する年齢が14歳に上がったが、野党が管理していた上院では、女性への選挙権の付与は妨げられた。印象的な政治家でありながら知識人であるという稀少な例であるレオン＝ブルム首相は別として、政府には主要な人物が含まれていた。その中には、内務大臣のRoger Salengro、共和国の将来の大統領である財務大臣のヴァンサン・オリオール（訳者註：第四共和制初期の大統領）、教育大臣として印象的なJean Zayがいた。

政府は、賃金上昇による需要増を背景にフランスを不況から脱却させようとした。長期間続いた組合と雇用主との間での交渉合では、団体交渉権が確立され、労働時間は40時間に設定され、10-12%の賃上げが認められた。1年につき2週間の有給休暇が保証され、労働者は、これまでは特権階級のものであった海辺のリゾート地を訪問する機会が与えられ、政府は、安価な列車のチケットとホテルの部屋を半額で提供しました。

これまで200人の理事によって運営されていた中央銀行であるフランス銀行（Banque de France）は、より責任を負うようになった。閣僚は、mur d'argent（お金の壁）を解体することを約束し、閣僚たちは、その壁は、時代遅れの社会経済システムを保護したと主張した。農民を助けるための対策が導入された。インドシナでは、共産主義者の勢力が増した後、1万人の政治犯のうち7000人の解放が行われた。著名なSFIO（訳者註：フランス社会党）のメンバーは、「すべてが可能です（不可能なことは何もない）（Tout est possible!）」と宣言した。

それは、あまりにも出来すぎており、そのようなことは、フランス現代史において最初でも最後でもない。何度も何度も、左（翼）へ傾く進歩の約束は失望で終わった。最初の革命は（訳者註：フランス革命）、全体主義的なテロ、腐敗、小作料を徴収する社会体制、そして、ナポレオン・ボナパルトの独裁と軍事的冒険主義へと変質した。また、ブルボン朝は、権力を失ってから四半世紀で権力の座に戻ってきた。1830年に、反動的なシャルル10世を打倒したことによって、ルイ・フィリップの「ブルジョアジーによる君主制」が導入されたが、彼の統治は腐敗した保守主義に変質し、そして、1848年の第3革命（訳者註：二月革命）と第二共和

政の創設、つまり革命的な価値観が、興奮した状態で激しく現れることにつながった。

数ヶ月のうちに、共和国政府は国民衛兵（訳者註：フランス革命時に、フランス各都市で結成された民兵組織）で血気盛んなパリの労働者を鎮圧するために送った。1870年にフランスがプロイセンに敗北した後、パリ・コミュンが発生し、それらは、新たな第三共和政の軍隊によって鎮圧された。政府は、大規模な社会進歩を招かず、女性から選挙権を奪い、自分に投票してくれる利益集団によって支持された大臣と同じような人の入れ替わりが激しい一連の「回転ドア」政権になった。

勝者ではあったものの、第一次世界大戦後フランスは疲弊した。適切な税システムがない中で、軍事努力に対する報酬による債務があるということはつまり、国は目的達成のためにもがき続けなければいけなかったということである。賠償として“ドイツが払ってくれる”という期待は打ち砕かれた。中央銀行はなすすべがなく、失業者が増えているにも関わらず政府がなんとか予算のバランスを取ろうとしているという状況の中で、1931年にフランスで起こった大不況は特に労働者層にとって厳しいものであった。軍は国の機運を反映して防衛政策をとった。ナチスがドイツを軍国化し、あのよく知られる前線の勝利の二ヶ月前にラインラントを再び占領していたが、フランスは反撃の力もなかった。

このため、経済の膨張政策と平等促進を約束したブルムとその仲間の援助による、新たな夜明けが期待された。また、保守派と、さらにはドイツ人を見て鼓舞される者さえる旧指導者の支持者たちは忌み嫌われた。19世紀終わりにドレフュス事件を機に爆発的に起こった反ユダヤ運動によって、ブルムは辛辣な攻撃を受けた。選挙で勝利する前に、極右の悪漢に車から引きずり降ろされ、締め降ろされたこともあった。アクションフランセーズ（訳者注釈：1894年にドレフュス事件を契機として作られた王党派組織）の創始者である反動主義的哲学者のシャルル・モーラスは、ブルムを「背後から撃たれるべき人」と称した。

左派と右派の対立は数年経ってもなお、大嵐であった。失業者の増加と生活水準の低下による政府支持率の低下は、執拗な反対運動に拍車をかけた。

1934年2月6日の夜、軍がセーヌ沿いの議員たちの部屋を荒そうとしたことから、危機は発展し4万人もの大衆にまで及んだ。彼らは集まって、急進的首相であるエドゥアール・ダラディエによる、パリの警察責任者でありその右翼的な思想で知られるジョーン・シャップの解雇に抗議した。（ダラディエはまた、反民主主義的な主張が含まれているとしてシェイクスピアのコリオレイナスの上演を禁止した。）警察との6時間にも及ぶ戦闘の末、14から16の命が失われ、1000人以上の負傷者を出した。年老いた政治家、ガストン・ドゥメルグは70歳にして南部議会に復帰し、「公共の安全における政府」を提出した。極右の運動はパリを行進するまでに及んだ。社会政党的新聞「Le Populaire」は「ファシストのグループは次なる戦争と市民戦争の目的のこししか考えていない。」と非難した。第三共和制政府が社会と政治のひびを埋めて10年が経ち決断の時は迫っていた。そしてフランスは左を選んだ。

つまり人民戦線が選挙で選ばれたということである。しかしその勝利は何かの幻想であった。右の過激派は抑圧された。共和制は維持された。しかし人民戦線の候補者以外への票が前回の選挙と比較してたった70000票しか落ち込まなかったのだ。中道左派が拡大したのは対立勢力が分裂している間にそれぞれの有権者に最も適した候補者を配置するという決まりによるものであった。

ブルムとその仲間たちは、議会制民主主義から外れた行動をとる労働者のやり方に対処するのに苦戦した。選挙での勝利の祝賀に対してストライキが行われ、製造再開の要求があるにも関わらず工場の占領は続けられた。有権者が都市の軍に対して不信感を抱いており、また利権が大きいという状況下において、軍は地方の有権者を代表する革新派を好んではいなかった。スターリンの対ファシズム同盟を推奨するという政策の一環として社会主義団体に入った共産党員は省庁に入ることはなかった。彼らは改革を行うこともできながら、自由に批判も行うことができるという位置にいることを好んだのだ。

社会党の構成員は舞い上がったが、現実の経済が彼らを失落させた。急激なインフレでフランの価値は減少した。公務員や年金受給者は物価上昇で窮地に立たされる工業労働者をよそに収入が上昇したため疎外された。新たな労働システムの融通が利かない性質と労働週への削減は障害をもたらし、熟練工の不足によって強められた。生産は下落し、政府はフランスを逃し私的な金の処理への非難は貴金属の流入を停止させた。

経済状況により政府は改革の「停止」を宣言した。公共事業の予算は減らされ金はドイツのラインラント再占領に向けた軍事費に当てられた。スペイン内戦における共和主義者側への援助に関するブラムの注意は支援者を疎外した。共産主義者はピレネー山脈を越えた軍事介入を推進した。しかし内閣は分裂し、共和主義者への支援が左右の亀裂を広げ国内の争いを起こす穏健な過激派の支援を減らすことをブラムは恐れた。

右派の攻撃は絶え間ないもので、大企業による資金援助を受けていた。暴力的な反ユダヤ主義者の代表者のXavier Vallatは首

相を、大半のフランス人から好まれていない「ずるいタルムード学者（注：ユダヤ教の宗教典範を研究する学派）」と説明した。似た考えの人々は「ブルムよりヒトラーがいい」という標語を用いてセイウチ髭の首相をモスクワの競りでの獣だと描いた。

内相の Salengro は第一次世界大戦でドイツに投降したという偽りの政治活動後に自殺した。軍の愛国主義者の Philippe Pétain は軍隊と家族の復活をよびかけた。首相として2期の間右派になる前に社会主義者の法律家だった Pierre Laval は議会政治の続行は不可能で年配の司令官の威厳で引っ張られる必要があると言った。

政府に対する主要な熱狂は弱まっていった。町中で左右の衝突がみられた。上院はブルムの金融政策を定める要求を拒否した。そして首相は政権獲得の一年後である1937年の6月に辞職し、チャーテンプスが9か月間介入した。ブルムは翌年3月、ヒトラーのオーストリア併合のときである、に復帰したが過半数をまとめることができずに3週間後に辞職した。

フランスはダラディエのもとで中立に復帰した。ダラディエはイギリスにおける彼のような存在であるチェンバレンとともにミュンヘン合意に参加し1938年9月にズデーテン地方の大部分をドイツに割譲した男である。彼が帰還のさいに敵意ある大衆を恐れたが、実際には歓声とともに歓迎され、彼はおもわず「大衆の愚かなことよ。この者たちは自分達は何を称賛しているのかわかっているのか。」つぶやいたほどだった。フランスは、ジュリアングリーン氏いわく、「恐怖の悪夢」のさなかにいた。

40時間の労働の一週間は逆戻りした。信念は生産促進のために導入された。財政改善のために税金があがった。1936年の夢は、経済的な現実、政治的な反対、改革への合意の不足のために地球に衝突した。それは多くの問題をもたらした。改革を可能にするにはもっと強情な実際的なアプローチが必要であったが、1936年の夏の時点ではそれは頭にはなかった。

半世紀近く後、社会党リーダーのミッテルランド率いる第五共和制の最初の行政は1981年の同類のユーフォリアのさなか政権を獲得した再び、改革を行う「つもりであった」左派政権はその非現実性を前に路線変更を強いられた。2012年オランドは首相になり新たな始まりを約束したふぁ、気づけば不況に痛めつけられていた。

人民戦線はそれゆえフランスの抱える困難の長い悲劇にぴったりと当てはまる。フランスにはこういう言葉がある：「私のハートはひだりにあるが財布は右にある」。欠片が下のときは二番目は一番目に何度も先行する。

Pincus 氏いわく、名誉革命は近代の二つのビジョンの対決の悔過であった。英国の世界支配の出発点として、この驚くべき一連の出来事は世界の変革のモデルとなった。

イングランドの 1668 年の名誉革命は近代およびそれを引き起こした革命の理解において重要な位置を占めている。学者はこれをイギリスの例外的な歴史における決定的な瞬間として歴史の中に同定している。政治学者はこれを自由主義の起源と関連づける。社会学者は他国の革命と比較する。歴史家たちは名誉革命を英国の稀有な様子すなわち古くからの仕組みが政治的な均衡を可能にしたさま（権威的王政と自由主義的民主制の均衡）をより確信させる出来事だと指摘する。文学士は英国のコモンセンスと中庸を定義づけた重要な瞬間であることを強調する。これらすべての解釈は深く広く繰り返されてきた革命の物語をよりどころとする。

不運なことに、この物語には誤りがある。そしてそれを新たなもの書き換えることによって、私たちが現代社会を理解するために用いている基本的な歴史的、政治的、道徳的、社会学的な諸分野を修正する必要性も伴ってくる。旧来の物語は英国が唯一無二の政治文化を守った偉大な瞬間である点を強調した。実際は、名誉革命は新たな近代性をもたらした。その新たな体制が近代文明の形成に非常に影響した。

慣れ親しんだストーリーにおいては、英国の人々はカトリックの王ジェームズ 2 世をプロテスタントの王ウィリアム 3 世とメアリに替えることを同意した、なぜならこの簡潔な四年間の治世の間にジェームズ 2 世は徐々に穏健で懸命な英国人と不和に陥っていったからである。彼は一連の有名な誤謬の中で、この物語に沿ってこれをおこなった。1685 年の後半、彼はロマンチックだが絶望的な甥（Monmouth の伯爵でプロテスタント）の反逆に過剰反応して、血の巡回裁判と呼ばれる大量処刑を行った。カトリックの政治的、社会的な地位を高める決心をして、ジェームズは英国法を完全に無視した。彼は国会やローマカトリックの軍、海軍に逆らう権利を主張した。1687 年に新設で違法の ecclesiastical commission を利用してプロテスタントの大学にカトリックの人間を受け入れるように強いた。マグダレン大学やオクスフォード大学が王の要求を拒否したとき、教員から役職ははく奪し施設はカトリックの神学校となった。

このかつて有名であった物語によれば、ジェームズが下院や上院にカトリックに反する英国法の撤廃の説得が失敗したとき彼は国会の力を弱めることを決めた。彼はまずテストアクトとペナルローの失効の権利を主張した。二つの国会の彫像としての法（テストアクトは政治軍事における sacrament は英国国教会の方式で行うこと、ペナルローは国教会でない方式でないものを処罰することを要求していた）は大陸カトリックの英国人を絶えず馬鹿にしていた。そのときにジェームズは王令を下したのであった。1668 年の 6 月に 7 人の国教会のビショップたちが、その違法性の根拠を宣教師のこぼれつみ食いによりペナルローとテストアクトを骨抜きにし、贖宥の宣告を拒否することによってジェームズを弱めた。ジェームズは 7 人を公開裁判のために呼び寄せた。注意深くといえるほどに選ばれたイギリスの陪審員たちはビショップたちに無罪判決を下し英国人の王についていくことのできる限度を示した。陪審の直後英国人はオランダ人のウィリアム 3 世（オラニ公）を招き、宗教的政治的な自由を取り戻そうとした。

イギリス人はウィリアムが 1688 年に英国の西に到着したことを熱狂的に歓迎した。ジェームズの軍隊は未来のマルバラ伯爵を含む数々の人々の亡命を経て消え去った。ジェームズ自身は妻と子供についていくかたちでフランスに亡命した。そして旧来の認識に従えば政治的に満場一致で可決した驚くべき瞬間であるが 1689 年の冬イギリス人はジェームズをウィリアムとメアリに替える合意がなされた。イギリス人は新たな王朝の開始を、権利宣言を根拠に、またジェームズがいかに英国法を違反していたかを描くことによって、正当化している。

この伝統的な名誉革命の考慮によると、両議院の指導者に率いられたイギリス人はイギリスの政体を 1688 年から 1689 年の間に最も穏健な方法で変えた。カトリック信者の王位継承を違法化し、非国教徒のプロテスタントの信仰を認めた寛容法の制定によって、彼らはわずかに継承者を変えた。それはきつとこの無血革命の特に故意でない結果であった。しかしこれらの結果は、カトリックのステュアート朝の君主がかなり悪用したイギリスの国民的な性質の自然な副産物という以上に、これらの出来事の直接的な結果として理解されることは少なかった。

これはすべてのイギリスの学童と多くの北米の人がかつて知っていた物語だった。これはビクトリア朝の歴史家 Thomas Babington Macaulay が 19 世紀半ばに初刊行された「イギリスの歴史」という著作で述べた話だった。その本はすぐに急騰したベストセラーでありずっと当然深く影響を与えるようなものだった。マコーレーは美しく分かりやすい散文で話を書いた。彼は骨を折るような研究に基づいて記述し、その見解はホイッグ派歴史学的な名誉革命の解釈の伝統的な言説になった。

ホイッグ派の解釈は強力な含蓄を複数含んでいた。まず、ホイッグ派の話によれば、名誉革命は革命的ではないという。他の後の革命とは異なり、イギリスは平和で、多くの者が合意し、貴族的で、全てが賢明なものだったという。イギリス人は政体、社会、文化を変える情熱がなかったという。実際彼らはジェームズ2世がそうすることを心配していた。次に、ホイッグ派の話は革命がプロテスタントによるものだったという。ジェームズ2世はイギリスにおいてカトリックを再起しようとした。名誉革命はイギリスがプロテスタントの国であることを確かなものにした。三つ目に、名誉革命がイギリス人の例外的な性質を示したものと断言している。大陸のヨーロッパ人は荒々しく極端な共和主義者と圧政的な王室の絶対主義の間で揺れ動いていた。対照的に、イギリス人は王権を制限し適度な人々の自由を適切な分だけ認めた。イギリスの教会が極端なローマ＝カトリックと過激なプロテスタントの派閥主義との間で賢明に中庸を貫き、旧来の構造を維持することで中庸かつ穏やかであった。この文脈で、階層的な社会構造は貴族階級と庶民の間に修復不能な溝を押し付けるものではなかったためイギリス人は維持し続けた。四つ目に、ホイッグ派の話者は名誉革命を強める不平はなかったと主張した。というのも、革命期間中イギリス社会はジェームズ2世の亡命以前からの変化は殆どなかったからだ。イギリス人の財産権が革命によって保証されただけだったが、絶対主義がもはやイギリスに存在し得なくなりイギリス経済の繁栄を確かにするものだった。

ホイッグ派の解釈を批判するのは時代遅れだが、自称修正主義者は事実その大部分を受容した。最近では Mark Goldie や John Miller などの修正歴史主義者は、ジェームズ2世の野望の制限された性質、王のカトリックびいきの政策で難航した保守的なイギリス国教会が果たした最も大事な役割、プロテスタントの非国教者への有限の忍耐に重きをおいた。しかし、終いには、彼らは1688年の革命は穏やかで、無血で、革命的という現代の言葉の意味通りではないというホイッグ派の話に納得してしまった。しかしながら、膨大な古文書の新発見や新たな歴史的過程の考え方によって、ホイッグ派の確立された考え方のあらゆる要素に異議を唱えることが可能になった。いまでは明らかだが、1688年から1689年のイギリスの革命は最初の近代革命だった。17世紀後半のイギリス人の経験は例外的でなく、しかし実は近代革命を経験したフランス、ロシア、メキシコと同じく典型的な（早熟な）国家だった。名誉革命は例外的なイギリス人の国民性を表したからではなく、近代国家の出現において指標となる瞬間であったから重要なのである。

17世紀後半の三つのイギリスの出来事は、1688年から89年の出来事の近代性と革新性を際立てた。まず、17世紀イギリスにおける社会と経済の注目すべき変化は、名誉革命の始まりとその外観を理解する上で必要不可欠だ。17世紀後半のイギリスの政治史は単純にその経済史との関係抜きにして理解することはできない。17世紀後半のイギリスは急速に近代化していた。イギリスの経済（そしてネーデルラントも）は、その他のヨーロッパ諸国が直接的、間接的な長距離貿易の制度的な影響を受けて低迷している中、上り調子であった。特に、イギリスが貿易の手を東インドと西インドへ広げたために、イギリスには以前からの様々な輸出品に加えて、タバコや砂糖などの新商品が流入し、それらは国内で消費されたほか輸出もされた。西インドと北アメリカ植民地が急速に発展したために、イギリス工業製品に新たな需要が生まれた。このように発展したために、イギリスの政治家は活気のある商業の力を利用するために、イギリス政府により積極的な役割を担わせようと考えた。社会と経済の変化から、1688年から89年の革命が避けられないのは自明であった。しかし、それが未来のイギリスを形作ったのだ。

二つ目に、ホイッグ党の歴史家とその批評家は、イギリスにおける反キリスト感情に敏感でありながら、ジェームズ2世のカトリックの誓約とジェームズが作ろうとした近代的で絶対的な意見に対する関係を真面目に受け取り損ねた、ということがある。ヨーロッパのカトリックが教皇インノケンティウス6世派とフランスのルイ14世派に完全に分かれてしまっていた時代に、ジェームズはフランス王の元へ身を寄せ、教皇に敵対した。生涯を通して、ジェームズはフランスのイエズス会に対して「深い愛情」を示し続けた。彼は1669年にフランスのイエズス会の父、エドワード・サイモンに対して、信仰の放棄を宣言していた。18世紀のカトリック歴史家の1人、チャールズ・ドッドはヨーロッパのカトリックに内在するイデオロギーの違いに敏感で、ジェームズを「イエズス会に対して頑固な不幸のもの」と評している。1680年代にジェームズは、ジャック＝ベニーニュ・ボシュエやビショ・モ、それぞれカリスマ派の宣教師、そしてもしかすると当時最も影響力を持ったかもしれないガリア主義の神学者であるが、その2人の書に強い興味を抱くようになった。これらの、ジェームズの宮殿に位置するベネディクト派の修道院での翻訳とイギリスのカトリックの新印刷技術による素早い発行によって、ジェームズに著作を広めてもらった人々は、二つの事柄について教皇の宣伝者に反対していた。フランスのカトリックの弁解者は、宗教上の異教徒は説得するだけでなく強制も用いながら改宗させることができる、と主張した。これらの人々は、異教は人間の意志による行動であり、そのためそれはしばしば壊して正しくする必要がある、

と信じていた。そしてまた彼らは教皇の擁護者に対抗して、君主の権力への制限は存在しないということも信じていた。君主たちは、彼らが長い時間をかけて主張したことには、主人に受動的に服従するだけでなく、能動的な要求もできるということであった。

ジェームズは彼の従兄弟であるルイ 14 世のように、教皇の神道ではなくカトリックの臣下を求めた。代わりに彼は自らの統治圏における絶対的な王権を主張し、同時にプロテスタント国においてカトリックを求めた。ジェームズはカトリックの弁解書の普及、カトリック学校と神学校の増加、カトリック教会の開講の促進に成功した。1680 年のイギリスを生き抜いた人で、日々の生活のカトリック的なものを無視することができた人はいなかった。そして、ジェームズは究極の目的を達成するために折衷しようとする熟達した政治家であったが、一つの真の教会があるべきだという意志は固かった。イギリスのイエズス会員ウィリアム・ダレルが示したプロテスタンティズムは「病氣」であった。彼はジェームズが息子であるジョン・ベサンの家庭教師に選んだ男であって、神は信仰の恩恵を受けようとししない人々を構わないということを教えていた。「神は人々の自然死の予期に関しては忍耐強くないが、少しも警告することなく人々をせきたててしまう。」と彼は警告した。ジェームズも、彼のフランスに影響を受けたカトリックの助言者の仲間も、彼らが推薦した人も、皆宗教の聖職兼務の擁護派であった。

三つめとして、ホイッグ史観（訳者註：歴史を「進歩を担った殊勲者」VS「進歩に抵抗した頑迷な人々」に分けて、両者の対立と前者の勝利として歴史を物語的に記述する歴史観）をとる歴史家と歴史修正主義（訳者註：歴史の物語性や因果律を批判し、進歩史観の否定や歴史的偶発性を指摘するもの）を批判する者は、政治の領域をあまりにも狭く理解しています。ジェームズ 2 世は、自らの言いなりになる議会を作る以上のことをしたかった。彼が実践した特定の種類のカトリックとルイ 14 世の成功した政治モデルに深く影響されて、ジェームズと彼の支持者は、近代において主力となった政治手法を開発した。マックス＝ウェーバーの用いた言葉を使えば、彼らは伝統的な世襲国家ではなく近代的な官僚国家を推進した（訳者註：ウェーバーは、『国家社会学』でこの語を使用していたと思われる）。彼らは、効率的で統制のとれた熟達した常備軍と世界クラスの海軍を育成した。ジェームズ 2 世と彼の顧問は、この近代国家は、彼の中央集権化と干渉主義（訳者註：他の地域の懸案に積極的に介入すること）の目的を支える（海外に）拡大する一連の資源を必要としたことことは十分に理解したため、すぐにインド、北アメリカおよび西インド諸島に拠点を持つ海外領土帝国は、資源を集めるための必要不可欠な手段であったと結論づけられた。彼はイングランドとウェールズ中のほとんどの自治体を地方政治の忠実な道具に成形する過程にあった。ジェームズ 2 世は、彼の支配の価値観を広め、その代わりとなる立場を沈黙させるために出版物や様々な政治機関を使った。ジェームズ 2 世の治世は振り返ってみると簡素でもろいかもしれないが、17 世紀後半の観点から彼は強力な組織を作り出した。

この野心的で成功した国家構築プログラムを実行することによって、ジェームズ 2 世は保守派が彼の業績を元に戻すことを不可能にした。1688 年には、平穏で小規模な憲法上の調整はありませんでした。ジェームズ 2 世に反対する者たちは、概して反動主義者ではなく、革命家であった。彼らはまた、近代化されたイギリスだけが、その当時のヨーロッパで競争できることを十分理解していた。しかし、ジェームズ 2 世とは異なり、革命家たちは、政治的な刺激としてフランスの君主制ではなくオランダの共和政に関心を向けた。彼らも、強力な陸軍と海軍を支えることができる国家を望んでいた。彼らもまた、そのような国家は中央集権的で干渉主義であるべきだと想像した。しかし、ジェームズ 2 世とその顧問たちとは異なり、革命家たちは、絶対主義よりも政治的参加を奨励し、カトリック教化よりも宗教的に寛容で、領土としての帝国よりもイギリスの製造業を促進することに専念すれば、イギリスは最も強力になると想像した。革命家たちは、これらの政治的選好がルイ 14 世の近代カトリック君主制とイデオロギー的に論争することを十分に理解していた。革命家たちはそれゆえ、フランスをバックにする可能性があるジャコバイト（訳者註：名誉革命においてジェームズ 2 世を支持した反革命勢力）の復元からブリテン諸島を守るためだけでなく、イギリスの製造業者が利用できるヨーロッパの市場が存在し、フランス流の絶対主義から保護することを保証するために、フランスとの戦争に全力を傾けて傾倒していった。それはジェームズがそのような強力な国家を創造することができたためであり、多くのジェームズ 2 世の反対者はそれが暴力に抵抗することができ革命的な変化によって将来のイングランドの君主制がジェームズ 2 世の近代絶対主義国家に再び生まれ変わることを防いだのは、ジェームズ 2 世がそのような強力な国家を創造することができたからである。1668 年にジェームズ 2 世を倒し、次の 10 年間に新体制を形成したのは必然的に革命家でした。

私たちは名誉革命を無血で、貴族的な、合意に基づいたものとして捉えるようになったが、実際の出来事はこれらのことのうちのどれでもなかった。1688—89 年の革命（名誉革命）は、もちろん、20 世紀の恐ろしい社会の大混乱よりも血に染まったものではなかったが、18 世紀の終わりのフランス革命とほぼ同じ規模でイギリスは、財産と人間に対する暴力に耐えた。例えば、歴史家 Jack

Goldstone によって引用されたような革命下のフランスの暴力を強調する統計は必然的にナポレオン戦争を含む。9 年戦争（1689-1697 ウィリアム王戦争とも呼ばれる）とスコットランド及びアイルランドでの戦争からの統計、すなわち、1688-89 年の革命（名誉革命）の直接的な影響をすべて含めると、死傷者の割合はフランス革命と同程度である。革命期を通して、国中のイギリス人が互いに脅威を与えあい、互いの財産を破壊し、互いに殺し合ったり、重傷を負わせたりした。ロンドンからニューカッスル（訳者註：イングランド北東部、タイン川河口に位置する工業都市）、プリマス（訳者註：イングランド南西部のデヴォン州にある港湾都市）からノリッチ（訳者註：イングランド東部のノーウォークの州都）までの（つまり、イングランドのどこでも）イギリス人は、暴力や暴力の脅威を経験し、あるいは暴力に対する恐怖に怯えながら生活していた。これは平凡な出来事ではなかった。また、上流階級による生真面目な交渉でもなかった。あらゆる社会的範疇の人々が通りに行き、イングランドの裏通りも幹線道路も武装して行進し、革命の理念を支えるためにわずかな量の場合もあったが、たくさんのお金を寄付した。ジェームズ 2 世がイングランドから逃げた後に貴族院の議員が平穏に王の後継問題を解決しようとしたとき、数万人に達した、怒っている群衆は、貴族の審議を短縮し、貴族を追い込んだ。ジェームズ 2 世の治世における権力、効率性およびイデオロギーの結束を考慮すれば、1688 年以降でさえも、多くの人々が彼らの王を大きな熱意で支えたことは驚くべきことではなかった。革命家たちは、ジェームズ 2 世のフランス様式の近代化を代替のものと取り替えようとしたので、保守的なトーリー党は、ウィリアム 3 世の近代化国家の創設を防ぐために可能なすべてのことをしながらもジェームズ 2 世の国家組織の解体を支持した。結局 1690 年代初頭に今めかしき敵に対して戦略的に意味ある勝利をいくらか収めたにも関わらずトーリー党は革命の勢いを止めることができなかった。1680 年代、90 年代、そしてその後に至ってずっと英国人は政治とイデオロギーに関する分裂を抱えることになった。非英国人の王に対し英国人が結集したことはなかったし 17 世紀後半に分別のない君主を消そうと分別あるイングランド人が協力したこともなかった。

17 世紀後半のイギリス人は最初の近代革命を築いたがそこには長きに渡る因果があった。もし前の時代の出来事（特に 1640 年代、50 年代の危機）によって国・宗教・社会に対する概念を広め変えるようなイデオロギーに関わる一連の議論がなされなければ、1680 年代、90 年代になされたようにイギリス人は国や社会を変えることはできなかったであろう。イギリスの政治家はジェームズ 2 世やウィリアム・メアリーの支援が仮にあっても経済が 17 世紀後半のヨーロッパに見られた不景気と経費削減の流れの中になければイングランドという国の機構を変えることはできなかったであろう。

名誉革命の結果は全くもって予想通りであった。イングランド銀行設立や対フランス戦争、宗教寛容はどれも多くの革命家が抱いていた明確な目標であった。まさにこれらの問題に関する議論が長く続いていたからこそ 1688 年と 1689 年の出来事をイギリス史の大転換だと理解するのは誤りであろう。現実の制度が新しく変わっていったとしてもこれらの問題に関する議論は続いていた。近代以前のイングランドが 1688 年に終わったわけでもなく近代のイングランドが 1688 年に始まったわけでもない。だが 17 世紀後半のイングランドの革命家はイギリスの国家と社会の関係が持つ性格を根本的に変えることに成功した。

彼らは近代（フランスのルイ 14 世に見られるような官僚絶対主義的な国家モデル）を受け入れなかったけれども、別の意味でうっとうしいものを生み出すような近代国家の概念を受け入れた。そこではイングランドが農業社会から工業社会に変わることが求められヨーロッパでかつて見られたような強大な軍事力で戦争で戦って立ち向かえるようにするために大規模な軍備構築が彼らの監督下で大規模に行われ宗教に寛容な社会も積極的に受け入れられた。ジョン・ロック（大抵初期の最も影響力ある思想家の一人として称される）もまたこのような革命家の一人である。もし名誉革命が近代自由主義の発展における決定的な一時だとすればその自由主義はその国には相反していなかった。自由主義は初期において穏健でも反国家統制的でもなかったのである。むしろそれは近代化と行動主義国家のための革命的計画だったのである。

1688-89 年の名誉革命では二集団の近代人が闘争した。両者とも長きに渡る不平等に抗って反動主義精神を訴えようとした。これは大抵の近代革命では典型的である。長きに渡る社会科学研究では革命とは近代化と伝統の衝突ではないからである。革命の状況というのは広く見たとき権力体制がいかなる理由であれ近代化を必要とした場合に生じるものだった。そのような場合に体制はその国に今まで以上に社会にまで深く広く根ざそうとし必然的に憤りが生じる。同時に過去からの急激な変化が知らされ体制は対抗勢力への制約を取り下げたのだ。可能性に満ちた革命家にとって仲間たる国民に伝統的で信頼できる生き方を破壊しようと説得する必要はもはやなく辛うじて変化のための特別な手本があることだけを言えばよかった。権力体制はもはやエリートの伝統たる忠義心のみでは成り立たず 17 世紀後半のイングランドの革命家は今なお典型的な政治のあり方に関する模範を提示したのである。

## ショパン：ポーランドの建前

ショパンはおそらく最も革新的で愛国的な作曲家かもしれないが決して革命的ではなかった。また人生の半分を政治亡命者として過ごしたがこれも主として状況の結果である。1830年11月ワルシャワの道端で革命が始まりウィーン会議で成立したポーランド王国がロシアへの隷属から関係を断とうとしていた時、20歳の作曲家はウィーンでヨーロッパ旅行の初期行程の最中であった。彼はパリに足を進めそこでもとにかく進み亡命者として生きることを選び仲間たるポーランド人と結束することを決意した。

だが大抵の同国人とは違って彼が速やかにルイ＝フィリップの資本主義体制に自らを適応させた。彼が極めて保守的な傾向にあったというわけではない。彼はある種潔癖でしゃれ男のように服を着こなしココットのように泊まり場を与えた。彼は優美さ、豪華さ、上品さ、そして彼が過ごしてきた貴族社会の性質すべてを愛していた。パリの貴族や成金の中流階級は演奏や娘たちのピアノレッスンのために惜しみなく金を彼に払い彼のことを自分たちと同じように扱っていた。

同時にフランスの名高い社会学者ジョルジュ・サンドとの9年間のやり取りを通して彼はルイブランのような急進派と十分につながることができたしフランス王家に号令を出すことができるのと同じように死にかけの共和党のゴドフロア・カヴェニャックの枕元に寄り添うことができたことは幸せなことであった。そのため1848年の2月末にパリで革命が起こった時も彼に恐怖はなかった。彼にかかったのはキャンセルになったコンサートだけであった。だが時間が経って彼は変化に憤慨し健康状態が悪くなったこともあってか動乱に対しても政治に対してもその他の点でも恐怖を抱いた。付随した混乱によりレッスンは続けられなくなり一層混乱する可能性があるという状態は彼をイギリスへの避難に追い込んだ。だがその滞在も計画通りには進まず彼は気づけば少数派の政治集団の台風の目の中にある状態にあったのである。

18世紀末のポーランド分割以降ずっとポーランド人の主張はイギリスでかなりの人気であった。*The Count de Poland* とか *Thaddeus of Warsaw* のような表題をつけた（そういうのは大抵女性作家のだけれども）情に訴えるような小説にある類の豊かなきらいがあった。タデウシュ・コシュシコ（チェ・ゲバラのようでもある）のようなポーランドの英雄は人気本や劇の主題になるしキーツやリーハント、ウォルター・サヴェージ・ランダー、テニソンらの詩でも取り上げられた。多くのポーランド人がナポレオンのために戦ったという事実さえ彼らの悪く勇ましい国民としてのイメージを損ねることはなかった。

この評判はポーランド人が立ち上がりロシアからの独立を宣言した1830年に特に美化された。ポーランドの軍隊は最初うまくいった一連の戦いでロシアに勝利を取っていたものの遂に1831年の秋に崩れ去った。何千ものポーランド兵士と愛国主義者がフランスやイギリスなどの国々へ避難を求めたが、ここでは彼らは英雄として迎え入れられ慎ましながらも年金を与えるために議会で資本が認められた。この結果として長い間定住したのである。（その一人が騎兵官のジョン・ギールグッドである）

ポーランドでの出来事に関するイギリスの読み物は豊富で興味深い。1つの指標として大衆は多くの小説や劇や歌において描写されている。テニソンは後にポーランドに関する何百行もの美しい詩（残念ながら家政婦の明かり取りに使われてしまったが）と評したものを書いた。トマス・キャンベルも同じテーマで詩を書いたが彼は文字通りポーランドの後援者の連携が形作られる中で強力なロビーイストたり得るものが何なのかについて確立した。

別の指標として11歳の将来のチャーティスト運動家の主導者であるアーネスト・ジョーンズは家を出て自由と戦うポーランド人に加わった。多くの急進派はポーランド分割とロシア・プロイセン・オーストリアのような専制国家の権力の拡大との間に関係を持たせていたしそれゆえポーランド人の主張と彼らの自由の間にも、またイギリスを含む他国での改革の間にも関係を持たせていた。「もしロシア人がニエメンの橋を渡ったら我々は無記名投票をするだろう」と *Westminster Review* の1831年1月の記事は言っている。「もし彼らがドニエプルを越えてきたら我々は穀物法をなくすだろう、そしてポーランドがスモレンスコを手に入れたら我々も税の面で1686年の頃に戻るだろう、我々は共に泥棒に囲まれそしてコンサートでコンテストを続ける以上のことはできない」イギリスに定住したポーランド人の多くはチャーティスト運動家や兄弟たる民主主義者を支援することで報いた。

ポーランド人の目的にもまた敵がいた。製造業者は、ポーランド人が誘発したロシア恐怖症は商売にとって不都合であると感じた。急進的で反穀物法の運動家であるリチャード＝コブデンは、ポーランドの支配階級は独裁的で腐敗しており、ポーランドの人々がロシアの支配下で過ごしたことは、実際は幸運だったとの意見を表明した。これは、ポーランド共和国を夢見ており、ポーランド大亡命の指導者であるアダム＝チャルトリスキ公爵を反動的だとして非難したポーランド人亡命者の一部によって裏付けられたように思われた。

それにもかかわらず、ポーランドに対する援助は依然として堅調であった。それは急進的なホイッグ党の議員であるダッドリー

＝スチュアート卿によって、ロンドンのデュークストリートの事務所の外で運営されたポーランド友人文学協会を通して上手く組織化された。約 300 人の会員の中には、当時、最も影響力のある人物も何人かいた。その最も熱狂的な支持者の一人は、チャールズ＝ディケンズ（訳者註：ヴィクトリア期の小説家であり、『クリスマス・キャロル』や『二都物語』で有名）であり、彼は、多くの会議や記念式典、晩餐会に出席した。どうしてもそれは加えられなければならない。何人かの主なポーランド人亡命者によるスピーチは、非常に長くそして首尾一貫していなかったので、ディケンズがドルセイ伯爵への手紙の中で認めたように、それらは、たいていディケンズをロシア皇帝に同情するように駆り立てた。彼のイギリス人の同僚がこれらに反応したことが、彼をイライラさせないということではありえなかった。ディケンズは 1846 年 5 月 8 日に開催された晩餐会でスチュアート卿が行ったスピーチに激しく文句を言った。彼は、「名高いポーランド人女性について話し、『しかし私は *Titchibowski, Lobski, Pastocrontik, Sploshock* や *Screweyzlunskifi* といったその妻や母である神聖な名前について言及した。』そして、あの人たちがそれについてすべて知っているかのように、全員が、あらゆる名前で熱意をもって大声で叫ぶことを公言している。」と言った。

文学協会は 1834 年 11 月 26 日にロンドン市のギルドホール（訳者註：市議会や市長選挙で用いられる市会議事堂）で 3000 人のゲストを呼び募金舞踏会を開き、市長とデボンシャー公爵夫人が出席した。翌年、ケント公爵夫人の後援のもと、同じような舞踏会がボクソールで開催され、メルバーン卿とパーマストン卿が出席した。別の舞踏会は 1835 年にランズダウン侯爵によって設立された「ポーランド人難民救済のための英国女性協会」によって組織された。これ以降、「ポーランド舞踏会」は毎年恒例のイベントになった。彼らは、貧しいポーランド人や文学協会の活動のために資金を提供しただけでなく、その理念が上流社会に合い、公共の領域のものになるようにしていた。

皇帝ニコライ 1 世が公式訪問でロンドンを訪れた 1844 年の夏、イギリス人のポーランド人に対する支援の盛り上がるとともに最大の試練が訪れた。女王の王室は、舞踏会を中止するか、少なくとも皇帝が去るまで舞踏会を延期するという提案で文学協会に働きかけた。舞踏会委員会の一員としての役割を果たしていたエミリー＝ラム、ロクスバラ公爵夫人とサマセット公爵夫人は拒否し、その結果、皇帝は侮辱を避けるためにイギリス訪問を縮小し早くイギリスを去らなければならなかった。

しかし、ポーランドの理念が引き起こした感傷的なものは、結局、人々をそれに反対させる方向へ変化した。イギリスの新聞、特に『タイムズ紙』は、文学協会がおそらく行っていたであろう慈善活動に疑問を投げかけて、もっとそれに飽き飽きした見方をし始めていた。アイルランドで飢饉が発生したため、ポーランド人亡命者のために行われた資金調達は、浪費だと思われるようになり、『モーニング・ポスト紙』（訳者註：現在、デイリー＝テレグラフ紙に吸収される）は 1847 年の舞踏会をロシアの名前に汚点をつけることだけを目的とした「ポルカ（訳者註：チェコの民俗楽曲でポーランドでも踊りの音楽として使われた）を踊りながらクーデターの宣言をしている」と非難した。

チャーティストは、依然として彼らを援助していたが、1840 年代には孤立主義者となり、ポーランドで何が起きているのかについての関心が薄くなっていった。「友愛民主党」は、ポーランドの暴動を記念して年次総会を開催し続け、1847 年の総会ではカール＝マルクスが演説した。しかし、彼の言葉が強くポーランドよりであれば、彼は、チャルトリスキや文学協会に代表される政治的理由よりも、苦しんでいる大衆の窮状をより気にかけていた。

1848 年の春に革命がヨーロッパ中に広まったので、ポーランドは破壊的活動の多くの最もらしい理由であるように思われ、ポーランド人はますますトラブルメーカーとして見られた。立派な人物であるチャルトリスキでさえ、プロイセンの支配下にあるポーランド人の権利を擁護するために首相のラッセル卿（訳者註：ホイッグ党党首で自由党結成に尽力した）と外務大臣パーマストン卿（訳者註：本名ヘンリー＝ジョン＝テンプルで「パクス＝ブリタニカ」を象徴する人物）に働きかけようとしたとき、革命を扇動しているとイギリスの新聞で非難された。

1848 年 4 月 20 日ロンドンに着いた時点ではショパンはこのことについて何も知らなかった。友人は彼にキャベンディッシュ広場の近くの部屋を用意してくれていたが彼はすぐにピカデリー（注：ロンドン最大の繁華街）から抜けたドーバー通りにあるより広い部屋に移住してしまった。そこで彼の友人でピアノ制作職人でもあるジェイムズ・ブラウウッドから精良なピアノをもらった。

「女王の前で演奏するときには、私宅で限られた人数の聴衆にマチネ（注：劇の昼公演）を披露しましょう。」彼は生徒とパリの友人アドルフ・ガットマンに、自分が指導と出演に対する料金を要求する立場にいるということを説明する手紙を送った。しかし、王宮での演奏の誘いはついに来なかった。

これにははっきりとした音楽的な理由があった。当時、フランスから広まっていた作品があからさまな嫌悪感を持って受け入ら

れたとは言わなくとも、冷遇されていたのに対して、メンデルスゾーンやシューマン、イグナーツ・モシュレスのようなドイツの作曲家の作品は、イングランドで大流行していた。確かにイングランドではリストやベルリオーズ、ショパンのような作曲家にもファンがおり、中には献身までするような者もいたが、その数は非常に少なかった。そしてまたロンドンでは、彼らは芸術の世界において欠陥を持った演奏者であるという意見も多かった。

「フレデリック・ショパンは私たちの考えつかないような手段まで用いて、幾多の評判を得た。しかしその評判の多くは作曲家としての彼の才能を否定するものであった。」という評が、London Musical World の紙面上での、1841 年に公表された Mazurkas（注：ショパンの作品）の概評の中でされた。「ショパンは全く平凡な人間ではない。しかし、彼は、更に悪く思われることには、ひどい浪費家であった。」彼はショパンのハーモニは「不器用」で、彼のメロディーは「弱々」しく、音楽を「とても荒々しく制限的」だと評した。そして最後に「ショパンの作品はひどい不協和音を鳴らしたてるような雑多な外観を成している。」とまとめられている。彼は最後に、ショパンは「芸術的にとるにならない」と付け加えた。

他には作曲者の夜想曲は「魅惑的で非人間的」だという主張もある。更に幻想ポロネーズを「病的な内容を表しており、芸術の外側にいる」という評価もあった。しかし「音楽は熱情を育て、最終的には礼節による制限を超えるのだ」と言いながら、民衆の B フラットマイナーソナタ（有名な葬送行進曲を含む）への非難に対して警告することもまたあったのだ。この種の表現の下敷きになっているのはある種の過度で不自然な控えめ（とり澄まし）であり、ショパンのような音楽の作曲家がドイツの作曲家と比べて何か清廉潔白さや神々しさが劣っていると感じる気持ちである。

Kent の公爵夫人がショパンを称揚していた頃（彼女は夜会でショパンが演奏する際、立ち上がり、話している人々を黙らせるまでしていた。）、その娘ビクトリアはドイツの作曲者に心奪われていた。彼女はまた、アルバート王子をはじめとして、ドイツのものの多くに虜であった。

ショパンはうっかりとフィルハーモニック協会と彼のコンサートでの共演を断流という過失を犯してしまった。健康を害したためにピアノで大音量を鳴らすことができなくなったことがその動機である。また彼は、自身の限られた聴衆に向けて演奏する時には強い印象を与えることができたが、彼が「強大で辛辣」と評し、ローストビーフやタートルスープといったイギリスにおいて特別だとみなしたものと比較した、オーケストラに引き抜かれることとなってしまった。

ショパンは、女王をその教母としていたサザランドの子供の公爵夫人がキリスト教の洗礼を受けていた 3 月 15 日、まさにビクトリアの前で演奏していた。スタッフォードハウス（現在はランケスターハウス）の構成員は 80 人おり、その中にはウェリントンブーツの公爵やのちのウィリアム 1 世も含まれていた。ショパンは自身の作品を少しと、ジュリアス・ベネディクトの作品、モーツァルトの作品は二つのピアノで演奏した。しかし、ショパンが「丁重な言葉たち」と評したものについて、女王がのち彼に対して言及した際、彼はほとんど反応を示さなかった。一彼女の記録には、彼女の御前で演奏した音楽家たちについては 2 人の名前の記述があるのみで、その他の人々は「幾らかのピアニストが演奏していた」という記述にとどまっていた。

招かれて宮廷で演奏するというショパンの失敗に政治が関係しているかどうかを判断するのは不可能だ。ドイツで革命が広がる間王子のコンサートはポーランド人の好意的な目を全く魅了しなかった。ベルリンで勃発した革命はプロイセンが自治を保障するポーランド人の領域を刺激した。イギリスの世論はその援助に乗り気だったが The Times が伝えたところによると他の住民に対してポーランド人の愛国者が行った暴虐に関するプロイセンの記事に報告に基づいて物語を作ると別の方向で暴力的に改めさせた。

Stafford 邸でのショパンの演奏の翌日、Dudley Stuart 侯は下院でポーランド人を保護した。しかし、Almack のダンス会場でのポーランドの舞踏会の 2 日前の 5 月 27 日には、ショパンが綴った通りだと “Teims” が不運なプロイセン＝ポーランドでドイツ人とユダヤ人の少数派が「印刷をはばかりな」恐怖に屈している間に踊ることを提唱したということで主催者の Palmerston 婦人に始まりイギリス人婦人を咎めた。というのも、「英雄的行為と不幸、特に女性の共感を呼ぶような質と状況はこの国では十分すぎるほどポーランドの名の下で関連づけられている」と意見を述べた。

舞踏会のある朝、The Times は「ポーランドの友人」からの手紙を出版した。それは貪欲なポーランド人にこれ以上金を与える必要はなく、全ポーランド人は今すぐ帰国すべきであると主張するものだった。「大衆のお金がポーランド人の難民に使われ義援舞踏会同がじ目的に利用される限り、受取人の期待はなく、我々は実際に我々に反して永住するように誘導し不要なサルマティア人（訳者注：ポーランド人）の要素を我々の混雑した人口に足すようなこれらの人々に希少価値を提唱している」というものだった。

それでも舞踏会は行われ、Morning Chronicle によれば「充分かつ粋に行われた」が、Morning Post は舞踏会を「年 1 度の過ち」

と報告し「休みなく騒がしい、この時既に残虐的な行為を企み残りのヨーロッパを巻き込み脅かす」上級階級からの支援を嘆いた。

ショパンは Cambridge 侯や Somerset 侯の好意で開かれる夜会で多くの金を稼ぎ、その地の他のどのピアノ教師の倍以上の授業料を請求しても弟子が絶えることはなかった。ショパンは「彼らは全員自分の手を見ていて感覚的に間違った音を弾くのだ」とパリにいた友人の Albert Grzymala に手紙を書いている。6月23日には彼は Eaton Place の Adelaide Sartoris の家で大衆向けコンサートを開き、150ギニーを稼いでサッカーの賞賛を受けた。7月7日には彼は St James's Square の Falmouth 侯の家でもコンサートを開き、多額の金を稼ぎ、紙面上で Jane Welsh Carlyle の「こんなピアノ聞いたことない。ピアノにそんな可能性があるなんて信じられなかった」という絶大な賛辞といった賞賛を受けた。

ショパンは多くの金に恵まれ実際に安定していたが、イギリス人に慣れるのは難しいと考えていた。彼は、「彼らは優しい人々だが、とても不気味だ」とポーランドの家族に宛てて書いている。そして突然旬が終わった時には、彼は稼ぎがすっからかんだと気づいた。ロンドンで手持ち無沙汰だったので、彼は説得されてスコットランドに旅行し、彼からパリでレッスンを受けた様々な知人と出会った。その一人の Jane Stirling は彼の音楽の狂信者ではなかったが、彼の人間性を崇拝していた。彼女はショパンに対し、法律上の兄弟であった Midlothian の Calder 家の Torphichen 侯を、その後でグラスゴー郊外の Johnstone 城にいた彼女の姉妹を訪れるように言った。彼はマンチェスター、エディンバラ、グラスゴーでコンサートを開き、Strachur や Keir 家、ハミルトン宮殿を含む田舎の様々な家に滞在した。彼は Calder から「どの場所でも暖かい親切さや果てし無いもてなしを受け、素晴らしいピアノや美しい絵を見つけ、図書館を選んだ。狩猟や犬、貯蔵庫に入りきらないような食事もあったが、あまり利用できなかった。」と Gutmann に宛てて書いた。彼はスコットランドを支配したポーランドへの支持に対する反ポーランド感情の高まりから守られたが、スコットランド滞在を楽しんだわけではなかった。

「my Scottish ladies」（と彼が呼んだ人々）による彼への愛と加護が重圧になりつつあった。Mrs. Erskine は彼をスコットランド教会に改宗させようとしたし、Jane Stirling は結婚の考えを抱くようになった。彼が Albert に説明した通り、彼は「結婚の寝台よりも墓場に近い人」であった。事実彼は貧しく、健康状態は悪化していた。彼は若干39歳であったが、彼の健康状態は病、おそらく結核、によって害されていた（とはいえ、彼は基本的にもともと病弱であった）。あまりにも弱ってしまい、使用人なしでは階段も登れなかったほどである。

彼の状態は10月の終わりに彼がロンドンに戻るときも回復しなかった。寒さと湿気が彼の肺を侵し、彼はオーバーコートを着たまま火に当たって一日を過ごしたものだ。それは、彼は窓を開放してセントジェームスの狭い部屋の中でも息ができるようにするためである。王子の従妹が夫とともにブリテンを旅行していたが、名医に往診を頼んだ。医者たちはイングランドをなるべくはやく離れることを提案するだけだった。

しかし病にもかかわらず、彼はまずポーランドに何かしらの貢献をするまでは帰れないと思った。世間の目にはポーランドは逆境のどん底にあった。「実のところ、この場所にかつてあったポーランドに対する同情は消えてしまった」伯爵は王子にそう書いてよこした。ポーランド愛国者たちの組織は11月のロンドンでのコンサートに期待していた（おののきとともに）。ショパンは、支持の表明のためにコンサートに参加することを宣言した。医者忠告にもかかわらず11月のロンドンの寒空の中やってきた。

「彼の演奏は天使のようだった」と姫は言った。「ロンドンのすこし教養の足りない人たちにはもったいないくらいだった」彼は何曲か短い曲を演奏し、そのあとダンスがはじまった。成功だと発表されたものの実際には去年の演奏会よりも売り上げは悪かった。各新聞紙がこのコンサートのことを取り上げた。

ダンスが始まると同時に、ショパンは帰宅した。しかし体調が悪化した。彼は次第にロンドンという煙たい冬の街に縛り付けられていたことがトラウマになって、パニックを起こすようになった。アルバートに「これ以上こんなところいたら死ぬだけじゃない一気が狂ってしまう！」と書いた。で、パリに行こうと考えた。

彼は11月23日に駅に運ばれ、姫に見送られた。Folkestone にてささやかな食事をとったが、帰り道で全て吐いてしまった。年内に彼は死ぬことになる。